

社会貢献の功績

副賞／日本財団賞（賞金50万円）

- 精神的・肉体的な著しい労苦、危険、劣悪な状況に耐え、他に尽くされた功績
- 困難な状況の中で黙々と努力し、社会と人間の安寧・幸福のために尽くされた功績
- 先駆性、独自性、模範性などを備えた活動により、社会に尽くされた功績



	佐藤 エミ子 54		NPO法人 自殺防止ネットワーク風 76		くるみクラブ 100
	高橋 竹夫 56		社会福祉法人 千葉いのちの電話 78		函館ひまわりの会 102
	鈴木 静穂 58		茂 幸雄 80		木村 義次 104
	鈴木 幸枝 58		特定非営利活動法人 外国人医療センター 82		梅本記念歯科奉仕団 106
	酒井 久江 60		V・GOLD 84		社会福祉法人 国際視覚障害者援護協会 108
	山本 和子 62		坂上 和子 86		NPO法人 希望の車いす 110
	八王子朗読の会“灯” 64		内田 和子 88		森本 喜久男 112
	特定非営利活動法人 のべおか城昇会 66		山崎 一誠 90		NPO法人 かものはしプロジェクト 114
	榊原 千秋 68		植原 康治 92		谷垣 雄三 116
	桐生 清次 70		Dioクラブ太助 94		川原 尚行 118
	高見 国生 72		竹内 敬一 96		Lawrence F. Campbell 120
	上野 和彦 74		山口 哲二 98		



さとう こ
佐藤 エミ子 (78歳/東京都文京区)

自身も難病である膠原病を抱えながら、昭和52年に稀少難病患者の会「あせび会」を設立された。難病に関する電話相談を40年にわたり受け続けると同時に、難病者の保養施設や福祉ホームの建設など難病患者の医療と福祉の充実を目指して活動されている。

●推薦者/秋本 福子

社会福祉法人 復生あせび会
理事長

「時代の波に翻弄されて」

昭和30年から40年代は、日本は戦後復興に沸いた記録に残る時代でした。その前半を私は都心の数少ない救急指定病院の事務職員として働いていました。丸の内界隈を中心に近隣は大型ビルの建築ラッシュ。昼夜を問わず重機の音が響き、慌ただしく走る救急車のサイレン。次々に運び込まれる現場事故の怪我人の姿が、今も脳裏にあります。

復興という活気に満ちた現実社会とは裏腹に、家族の看取りもなく命を落とす地方出身の日雇い労働者の無惨な姿に、私が初めて社会の裏表に気づいた時でもありました。しかも社会全体は浮き足だったような興奮状態にあり、人々は繁栄と豊かさを求め月月火水木金で働き、高度経済成長へと突き進んでいきました。その間私は労働力不足の職場で、泊まり込みや深夜まで働くのが当然と言う日が続き、やがて10年を過ぎた頃から、次第に身体はむしばまれ、ボロボロと崩れゆくを感じておりました。結果、昭和41年1月、13年間働いた職場を退職、否応なく入退院を繰り返す療養生活に入ったのでした。

それから4年後、知人の医師の依頼で「患者会」設立の手伝いを半年間の約束で引き受け、軽い気持ちで関わった患者会活動が、大きな時代のうねりに巻き込まれ押し流され、気がつけば39年の歳月が経ってしまいました。

「難病」という言葉は昭和45年頃から、原因不明の奇病「金の切れ目が命の切れ目」と報道されていましたが、私は高度経済成長のひずみとして、時代が生み出した病と考えておりました。しかし、特別の志も信念もなく係わった私の患者会活動は、1つの新聞記事に端を発し、あっという間にあたかも全国の「難病患者の相談窓口」であるかのように広がり、一人住まいの私生活は一変しました。ある時は24時間鳴りやまぬ電話や、地方からの突然の来訪者に戸惑いな

Emiko Sato (Age 78/Bunkyo-ku, Tokyo)

Afflicted with connective tissue disease, an intractable disease, Ms. Sato established an association for people suffering from the same disease. While serving as the chairperson of the Japan Liaison Council for Intractable Disease Associations, she established the “Asebi-Kai” (Foundation for Patients of Rare Intractable Diseases). Over a period of 40 years, Ms. Sato has provided telephone counseling for people with intractable diseases and has campaigned to improve the medical care and welfare of people afflicted with intractable diseases through the construction of respite facilities and welfare homes for these people.

Recommended by Ms. Fukuko Akimoto

がらも逃げ場はなく、降って湧いた異常な現実を受け入れるためには、人智を超えた何者かによって「与えられた運命」と考えざるを得ませんでした。

この間、どれほど様々な病気の患者・家族の不安と嘆きに耳を傾け、家族を失った喪失の悲しみに寄り添った事でしょう。そしていつしか私は、人は皆、深い孤独や悲しみ、苦しみを背負った時、その一部でも吐き出す場所と、相手が必要なことを学び、その役目が私に課せられた人生の道であり、生まれながらの運命だったのだと受け入れ、流にまかせることにしました。人生の愛別離苦は永遠の課題、今と言う時代の変化や繁栄の陰で、振り落とされたり、不運な運命のもとに苦しむ人々と共に生きる事を決意し、その一筋の道を歩んできました。だが、40年を振り返っても、社会の変化はあまりにも大きく、人々にもたらした生活の変化は、人の心の価値観も変え、家族、地域社会など人間関係の細分化が進み、大切な物まで失ってしまった現代社会に寂しさ以上のものを感じるこの頃です。



神経線維腫症Ⅱ型講演会の様子



秩父宮記念公園にて



御殿場荘新緑の集い





たか はし たけ お
高橋 竹夫 (72歳/石川県加賀市)

NPO法人「福寿草の郷」
理事長

「人は皆必要とされ生まれ、愛し愛される貴重な存在である」という信念を礎に二十歳のころより50年にわたり非行に走った青少年の自立更生支援や障がい者の就労支援、そして引きこもりやニート、また社会から疎外されがちなホームレスの社会復帰支援などを続けている。平成12年にはNPO法人「福寿草の郷」を立ち上げ、県内外から諸事情を抱えた方を受け入れ、苦楽を共にしながらより良き環境のもと健やかな生活を営めるよう支援を行っている。

●推薦者/室谷 弘幸

「人は必要とされ生まれ、愛し愛される貴重な存在である」という信念を礎にハンディを抱えた方が、その人らしく輝いて暮らしてゆけるようにと、福祉活動を行なうようになり半世紀が過ぎました。これまで3万件以上の相談に応じてまいりましたが、全ての方を幸福に導くことができたわけではありません。過去には助力したものの問題解決の前に借金苦で一家心中されたご家族や、重度の障害者の受け入れが不可能なため飛び降り自殺された母親もいらっしゃいます。取り返しのつかない事態が悔やまれ自らの力不足を苛みました。そのためどんな相談にも耳を傾け全力で難に立ち向かい、ある時は「自らに難が振りかかろうとも全力で他者の幸福に寄与することでしか悔やまれる方々へ報いることが出来ない」と活動を続けてまいりました。

平成12年には「福寿草の郷」を立ち上げNPO法人として認証を受けております。志を同じくするスタッフと24時間体制で可能な限り相談に応じるとともに誰もが気軽に立ち寄れる止まり木として施設を開放し、心身の拠り所、成長の場となるよう努めております。現在ニートや引きこもり、障害者、身寄りのない方、一人であることの多い高齢者等が年齢や障害の有無に関係なく集い、複数の企業から下請けの仕事をいただき訓練をしております。

また農園での作物栽培や当法人開催のイベントなどを通して地域の方とも交流し、各々の課題を乗り越えようとしています。私どもは本人の意欲と適性を尊重しながら意志に合った就業を共に考え、社会へのはばたきを後押ししてきましたが、幸いに就業合間に顔をのぞかせる彼らの多くは勤労による達成感を得て活力に満ち溢れています。しかしながら一方では一旦自立

Takeo Takahashi (Age 72/Kaga, Ishikawa Prefecture)

Building a facility in the mountains of Kaga City on his own while in his 20s, Mr. Takahashi began assisting in the rehabilitation of youth who go astray and in enabling them to support themselves and has now been doing this work for 50 years. During this time he has continued to assist youths who have shut themselves off from society and become recluses (“hikikomori”), youths referred to as “NEETs” (not in education, employment or training), and homeless persons, who tend to be shunned by society rejoin the ranks of society. In 2000 Mr. Takahashi established “Fukujuso no Sato,” the third NPO recognized in Ishikawa Prefecture, where he continues his activities.

Recommended by Hiroyuki Muroya

できても働く場がない方や、自立した生活に馴染めず情緒不安定に陥り、私どもに再び助けを求め方も増えております。彼らの中には社会保障制度の隙間に入り込み、十分な法的援助を受けられない方も多くおられます。

また家族の愛情があっても諸事情あって共に暮らせず、将来的にわたる支援を望まれる方も増えてまいりました。顕著となる切実さに、私どもは迷える時の心の止まり木としての機能を強化する必要性を痛感するようになってまいりました。今後は当法人内での事業を充実させ、受け皿としてのキャパシティーを広げてゆけるよう、一層の努力をはかってまいりたいと思っております。依然として課題は山積しておりますが、これからも私心を無くして被支援者と接し、彼らが自らを愛しみ、与えられた場所で自分らしい花を咲かせてゆけるよう助力を重ねて参りたいと思っております。



稲刈り



作業風景



下請け作業



じゃがいも植え付け



自然体験交流会



玉ねぎの収穫



すずき しずほ
鈴木 静穂
(71歳／静岡県静岡市葵区)



すずき さちえ
鈴木 幸枝
(67歳／静岡県浜松市)

共に全盲女性で、鍼灸治療業の傍らボランティアで毎年視覚特別支援学校に寄せられる多くの点字本の校正を約50年間、2人合わせて1千冊以上も行なう活動を続けられている。
●推薦者／竹内 龍幸

鈴木 静穂

「点字と私」

私は生まれながら視覚障害であった為、10歳にして初めて静岡県立浜松盲学校へ入学いたしました。

点字とのつき合いは、それ以来ほぼ60年になります。そもそも点字とは、フランスのルイ・ブライユによって考案されたもので6つの点からなりたっており日本式50音の配列をお考え下さったのが石川倉次先生であります。点字は全く表音文字です。皆さんの「片仮名」や「平仮名」を読み書きするのと同じです。

普通の書物を点字に直す作業を「点訳」といいます。一点の違いによって意味が異なりますので点訳された本を直す作業が必要です。それを点字の「校正」といいます。例えば小説の主人公を「あがわさん」としましょう。それが「かがわさん」或いは「さがわさん」と書かれていれば点を消して「あがわさん」に直します。どんなにベテランの点訳者でも誤りがありますから点字の校正は絶対に必要であります。

40有余年、点字の校正をして参りましたが、私自身障害者でありますから、情報や資料も乏しいのでいろいろ工夫しております。「NHK」の高校講座、特に「国語」（古典、国語総合、現代文）や「倫理」を聞くように努力しております。各々の先生方が分かり易く解説して下さいますので非常に参考になります。

点字には、もう一つ「漢点字」というものがあります。それは記号にはわかりありませんが「表意文字」がありますのでかなり理解度を増します。ただ全て記憶によるものであることと

Shizuho Suzuki (Age 71/Aoi-ku, Shizuoka, Shizuoka Prefecture)

Sachie Suzuki (Age 67/Hamamatsu, Shizuoka Prefecture)

Both Ms. Shizuho Suzuki and Ms. Sachie Suzuki, who are completely blind and who operate an acupuncture and moxibustion therapy business, have been volunteering as braille proofreaders for about 50 years. During this time, they have proofread over 1,000 books, which are donated every year to the Special Needs Education School for the Visually Impaired.

Recommended by Mr. Tatsuyuki Takeuchi

読み書きが非常に困難を極めることから余り普及しておりません。もし、6歳からこの「漢点字」を学ぶことができたとしたら視覚障害者もあらゆる分野での活躍が可能になると私は信じます。教育の場で「漢点字」が採用されますことを強く願うものであります。



静穂さん

鈴木 幸枝

「点字校正をはじめたきっかけ」

昭和49年3月、静岡県立浜松盲学校（現浜松視覚特別支援学校）を卒業して七年間、市内の治療院で働きました。そして昭和56年に念願の家ができ実家のそばで開業しました。開業当初はひまなのも手伝って大作の「徳川家康」の点字で写したものを読み始めました。私は途中失明ですので盲学校を卒業したとは言え点字を読むのが遅くてもどかしい限りでした。斜め読みの様なことをもしてみましたが見えませんでした。

そんな時に盲学校の竹内先生から「点字の校正をしてくれませんか」とのお話がありました。その時は正直言って迷いましたが「ゆっくりやってくればいいですよ」と先生のお言葉に甘えて一冊目をお引き受けしました。校正では、「ちゃんと読まなくては駄目だなあ」と思い読み始めました。

初めの頃は小学生向けのものが多くきました。そのうちだんだん楽しく読める様になってきました。といっても決して早く読める様になったわけではありません。そうして3年程たった時、「読むのが少し楽になったな」と感じました。これなら続けていけると思い嬉しくなりました。

折りも折り、浜松市と掛川市にお住まいの男性が、自分の点訳されたものを直接送って下さり、大人向きのもを校正させてもらう様になりました。

浜松市内の方からは、「天と地と」をはじめ時代物が多く届きました。掛川の方からは現代物が届きました。「潮騒」もわくわくしながら校正させて頂きました。年がすぎ「サラダ記念日」も楽しく校正させて頂きました。これはブームになり多くの見える人と読めて嬉しかったのですがお二人とも故人になられました。でも竹内先生自身の点訳された「万葉集」「山家集」「実朝歌集」など註釈つきの本など、思ってもみなかったものも校正させて頂きました。

もう20年以上も前になりましたか。パソコンでの点訳が主になり画面上での校正ができるようになり点字盤での校正はなくなるのではないかと心配していましたが、浜松付近ではまだ

個人で一点一点点訳され校正が行われています。手書きの文による校正も行われています。皆様のご健康をお祈りすると共に私も精一杯校正の仕事の続けたいと思います。



幸枝さん



さか い ひさ え
酒井 久江

(68歳/東京都青梅市)

点字を学び地域で点訳の協力をしたのに始まり、全国で2番目に設立された東京の盲老人福祉施設「聖明園」に昭和43年から勤務する傍ら、全国盲老人福祉施設連絡協議会の事務局員をボランティアで引き受け、盲老人福祉施設の調査研究、職員研修の企画から開催、盲大学生奨学金制度の創設や海外の盲人福祉協会との交流など、視覚障害者福祉一筋に42年にわたり活動を続けられている。

●推薦者/日本盲人社会福祉施設協議会 会長 本間 昭雄

全国盲老人福祉施設連絡協議会
常務理事

昭和43年4月、聖明福祉協会に就職、盲老人ホーム聖明園において、視覚障害者の園長の秘書役と、丁度「全国盲老人福祉施設連絡協議会」(全盲老連)が発足したこともあって、併せて事務局の仕事もさせて頂き、現在まで42年にわたって勤務させて頂きました。

当時、盲老人ホームは奈良、東京、広島に3県に4施設でしたが、全盲老連を組織し、全国の都道府県に1施設設置を目指していました。盲老人の生活実態を知り、専門施設の必要性を広く知って頂くため、各種調査を実施し、報告書を資料として関係行政、団体に訴え、会長はじめ会員施設の尽力により、現在盲老人ホームの無い県は6県のみとなりました。現在加盟施設は、養護盲老人ホーム、聴覚障害老人ホームと特別養護老人ホームとあわせて80施設、利用者は約5,000名いらっしゃいます。

盲老人のための専門的ケアは一般の老人ホームの業務量を遥かに超え、人員増の必要性を示すため、盲老人ホームで働く職員の勤務状況等を綿密に調査し、陳情を重ねました結果、何年もかかってやっと認められ、ケアワーカー、看護師等の職員増員を実現させて、ケアの充実に努めることが出来、盲老人ホームの存在、必要性を認識させて頂きました。

また、全盲老連では、視覚障害者ケアの専門性を重要視して、職員の資質向上のための研修会をはじめ、ハンドブックやマニュアルなどを発行して、研修会、会員施設における研修会や学生、ボランティアの方々の研修にも利用させて頂き、盲老人の幸せのために活用しております。特に、新任のケアワーカー研修会は現在までに30回約1,400名が受講、各地の盲老人ホームで主

Hisae Sakai (Age68/ Ome, Tokyo)

After learning Braille and beginning to assist with translating books into Braille in her local area, Ms. Hisae Sakai became a volunteer in the secretariat of the National Council of the Homes for the Aged Blind Japan while working at Seimeien, a welfare facility for the aged blind in Tokyo and the second such facility of its kind in Japan established in 1968. For 42 years Ms. Sakai has continued to volunteer her time for the welfare of the visually impaired in a wide range of activities including surveys of welfare facilities for the aged blind, planning and conducting staff training, establishing scholarship programs for blind university students, and promoting exchanges with overseas welfare associations for the blind.

Recommended by Mr. Akio Honma, Chairman,
Japan Council of the Social Welfare Facilities for the Blind

任になったりベテラン職員として活躍されている姿を見ることは、本当に嬉しいことです。

聖明福祉協会においては、盲大学生奨学金制度発足について、事業内容、規則、貸与式等の計画に携わり、40周年を迎えたこの制度のなかで、盲大学生とも関わり、実力ある学生が成長し素晴らしい仕事をしてゆく過程を知ることができたことも、大きな感動でした。

盲老人ホームの利用者は、目をご不自由であっても、自身の生き方をしっかりもっていらっしゃる方も多く、私たちにとって人生の先輩であり、良き教師であり、本当に沢山のことを学ばせて頂きました。お一人お一人の状況に合わせて、施設での生活が豊かであるよう、全盲老連で作成しました「ケアサポートプラン」をもとに個別計画を立てて、ケアに当たらせて頂いております。

世界の盲老人ホーム、視覚障害者施設などの視察などもさせて頂き、特に欧米と豪州に3ヵ月ずつ滞在して、その実態を研修会他様々な機会に報告会や報告書や各種団体の機関誌などに掲載させて頂いて、海外の福祉の研究に提供させて頂きました。聖明福祉協会と豪州の盲人協会との姉妹提携のための準備や、提携式典に秩父宮妃殿下、駐日豪州大使ご夫妻をお迎えした時のことも、とても嬉しい思い出です。

高校時代の日本赤十字青年奉仕団の活動と、卒業後点字を学んだことで、「生涯視覚障害者のための仕事をしたい」と切望したことに始まり、無力の私でも、今日まで視覚障害者はじめ多くの人々から学ばせていただき、励まされ、支えられて、働かせていただけたことを心から感謝いたします。



全盲老連総会にて事業報告を行う



全盲老連視覚障害者ケア専門技術認定講習会にて



聖明福祉協会創立30周年・姉妹提携式典



聖明園園内行事ハイキング



やまもと かずこ
山本 和子
(78歳/和歌山県和歌山市)

昭和45年に、有志で視覚障害者を対象とする録音図書制作を目的に和歌山市で「和歌山グループ・声」を発足させた。京都市の劇団出身であり、地方局のアナウンサーを勤めたことなどの経験を活かし、朗読指導、録音、編集、企画、運営など、活動の全般を担い、「ボランティアであっても技術はプロ並みに」を目指し40年にわたる活動を続けられている。会員は大人88名、小学生39名。

●推薦者/井谷 美也子

朗読ボランティア
和歌山グループ声
名誉会長

この度は、社会貢献の部において、このようなすばらしい賞を頂き、誠にありがとうございます。また、貴財団設立40周年とお聞きし、これもまた何かのご縁と密かに喜びを感じている次第でございます。と申しますのは、私が夫婦でこの和歌山グループ声をスタートさせましたのも、1970年11月のことで、今年で40周年の朗読発表会を開催したからでございます。

今でこそ100名近い会員がおりますが、始まった当初は、5名からのスタートでした。子供が通う小学校に、視覚障害を持ったお母様がいらして、「子供の学級だよりが読みたい」という言葉を聞き、録音することから始まりました。私の自宅に集まり、夫が趣味で持っていたオープンリールの録音機に声を吹き込み、時間をかけてダビングをして差し上げていました。そこから当時の和歌山市盲人協会婦人部との交流が生まれ、「料理の作り方テープ」を小さじ1杯をどう読めば分かりやすいかと悩みながら製作。1976年に和歌山県が発行している公報誌「県民の友」の録音をさせて頂くようになり、和歌山グループ声の基礎が築かれたのです。

あれから40年、ボランティアという言葉が当たり前のように使われる時代になり、私どもの活動に多くの方が賛同し、入会して下さるようになりました。活動も朗読テープの製作だけでなく、健常者と障害者が共に作るステージイベント・車いすダンス・テープからデージー録音へと進化していこうとしています。

若い頃に司会や演劇に興味を持ち、人前で話したり読んだりした経験から、ただ単純に声に出して表現する事が好きというだけで、ひたすら進んで参りました。今思えば、お節介おばさん以外の何者でもなかったでしょう。ですが、障害が有る無しに関わらず、こうして人の中に

Kazuko Yamamoto (Age 78/Wakayama, Wakayama Prefecture)

In 1970 Ms. Yamamoto with other volunteers established the “Reading Volunteer Group · Voice” in Wakayama City to create a library of recordings for the visually impaired. Utilizing her experience working with a theatrical group in Kyoto and as an announcer for a local radio station, Ms. Yamamoto took charge of the overall activities including coaching the reading, recording, editing, planning and management of recordings. With the aim of offering “professional-level skills despite being volunteers,” she has continued her volunteer work for over 40 years. The group is comprised of 88 adults and 39 elementary school children.

Recommended by Ms. Miyako Itani

飛び込んでいくことが、私が生きている事の証しだったのです。益々人間関係が希薄化し、家族ですらお互いに関心を持たなくなってきている世の中です。命のある限り、お節介おばさんを貫き通し、紡いできた道を全うしたいと思っております。

最後になりましたが、公益財団法人 社会貢献支援財団様の今後益々のご発展を心からお祈りし、また、これまで和歌山グループ声を応援して下さいました方々、前しか見ずに進む私に付いてきて下さった会員の皆様には、深く感謝を申し上げ手記とさせていただきます。



40周年記念発表会で朗読



県内朗読ボランティアグループの
合同研修会で講師



公報紙「県民の友」のゲラ刷りを見て
読み手を割り振り

いちご狩り列車内で紙芝居





会長 小林 敦子

はち おう じ ろう どく かい ともしび 八王子朗読の会“灯”

(東京都八王子市)

昭和52年に八王子市に発足した音訳（朗読）を中心に福祉活動を行うボランティアグループで、今年で33年目を迎える。123名の会員が①録音図書制作、②校正、③テープ雑誌「街かど」④対面朗読、⑤週刊誌、⑥新聞リーディング、⑦俳句、⑧デージー⑨蔵書管理の9つのグループに分かれ、常に視覚障害者の立場に立って「目の代わり」を意識し、心のこもった「声のボランティア」を目指して活動されている。

● 推薦者／八王子市教育委員会 教育長 石川 和昭

私たちは目の不自由な方々に、音訳・朗読などを中心とした福祉活動を行うボランティアグループです。

昭和52年9月、会員10名で会が結成され、視覚障害者の介添えと朗読から始まり、昭和61年には朗読を主とするグループとなり、平成3年に現在の名称「八王子朗読の会“灯”」となりました。

現在、会員は123名（うち男性7名）です。心身障害者福祉センター主催の初級音訳講習会の修了者のうち、希望者が入会。

主な活動は、①録音図書の作成（S54～図書館の蔵書、盲学校関係の図書、個人の依頼など）②街かど（図書館発行、S60～地元八王子の話題中心のテープ雑誌制作、月2回発行）③対面朗読（S60～八王子市内の4図書館と盲学校など7ヶ所、年間800回以上）④週刊誌（図書館発行、S61～記事抜粋で制作、毎週発行）⑤新聞リーディング（心身障害者福祉センター発行、S61～記事抜粋で制作、毎週発行）⑥俳句（心身障害者福祉センター発行、H5～新聞俳壇など制作、月2回発行）⑦DAISY(デージー)(H11～デージー図書の制作、デジタル録音の研修と実践)⑧蔵書管理（S54～）⑨朗読会（H15～年2回、図書館と共催）などです。

活動区域に都立八王子盲学校があることから医学書・教科書の依頼が多いのも特徴で、あん摩マッサージ指圧師国家試験問題集などの音訳は、資格取得や就労に向けての一助になるとの

Hachioji Reading Group “Tomoshibi” (Hachioji, Tokyo)

A volunteer group engaged in welfare activities centered on the transliteration (reading aloud) of the printed word, Tomoshibi (lantern) was established in Hachioji in 1977 and is now in its 33rd year. The group's 123 members are divided into nine groups engaged in various tasks: recorded book creation, proofreading, recorded magazine “Machikado,” face-to-face reading, reading aloud, weekly magazine reading, newspaper reading, haiku, DAISY (Digital Accessible Information System), and library management. Approaching their activities with a constant awareness of the position of the visually impaired in society, the group members' aim is to become caring “voice volunteers” who can provide a service “in place of the eyes” of the visually impaired.

Recommended by Mr. Kazuaki Ishikawa, Superintendent of Schools,
Hachioji City Board of Education

ことで、大変喜ばれています。

音訳に当たっては、全て会員相互による校正が行われ、正確で分かりやすい、聞きやすい録音を目指しています。自主勉強会や外部講師を迎えての研修会も毎年行い、常により良い読みを探る努力をしています。

また、平成16年からは心身障害者福祉センター主催の初級音訳講習会の講師を依頼され、会から数名を派遣しています。さらに新入会員に対しては、平成8年から実践活動へ向けての新人研修会がスタートし、東京都の指導者講習会修了者が指導に当たっています。

デジタル化の波は音訳の世界にも及び、テープからCD(デージー図書)へと急速に変わりつつあります。音訳者とデージー編集者のさらなる養成がこれからの大きな課題です。

「目の不自由な人の役に立ちたい」というグループ結成時の初心を忘れず、これからも頑張っていきたいと思えます。



「街かど」モニター中



「DAISY」編集作業



「週刊誌」記事分けと編集作業

「新聞リーディング」録音中



理事長 土田 聡

とく てい ひ えい り かつ どう ほう じん じょう しょう かい
特定非営利活動法人のべおか城昇会
 (宮崎県延岡市)

平成2年6月より延岡市で障がい者の地域社会における自立生活支援事業を行うことにより、福祉の増進を図る目的で会を設立して以来、20年にわたる活動を行っている。通所生のための体験事業として農作業を実施、野菜類の栽培収穫、販売を行い、能力開発として養殖事業、リサイクル事業や公共施設の清掃受託、民間不動産業者と提携し引越し作業、清掃作業などを行う。更に、精神保健福祉の啓発や教育機関とも協同してボランティアや学生を受け入れ利用者と学生の交流の場も提供されている。

●推薦者/社団法人 日本精神保健福祉連盟
 会長 保崎 秀夫

平成2年6月、本会は精神障がいを持った方達の親が集まり、家族会・大瀬作業所として発足した。

日中行き場のない精神障がい者の居場所として、延岡市大瀬川の河川敷を借用して畑作業を始めた。河川敷の畑は自然災害で収穫は儘ならないが、癒やしの場としては非常に喜ばれた。

指導員は親達で、週3日制で8名の障がい者（通所生）と一緒に快適な場所を醸し出した。平成8年には通所生も16名に増員し、週5日制で順調な作業所として運用できるようになった。ところが平成9年、台風19号の来襲により河川敷の農業施設の全部が流出してしまった。

途方に暮れている時、通所生の6年間の勤勉さが認められ、大貫町（現在の施設場所）の地域住民が、宅地と農地の世話をしてくれたと同時に、地域住民として受け入れてくれた。特に、精神障がい者は往々にして地域社会から敬遠されがちだが、通所生のまじめに懸命に生きている姿は、地域の方の心を惹き、作業所に立ち寄りの方が増えていった。

平成10年からは地域の婦人会の応援で、作業所内で「小さな星のコンサート」が開催され、例年県北の延岡市精神福祉連絡協議会の恒例の行事へと発展していった。

NPO Nobeoka Joshokai (Nobeoka, Miyazaki Prefecture)

Japanese Federation of Mental Health and Welfare was established in June 1990 in Nobeoka City to improve the welfare of people with disabilities and since then has engaged in a range of projects over the past 20 years to help people with disabilities live independently in the local community. These include agricultural operations, growing and harvesting vegetables, and selling produce as activities which give people with disabilities practical work experience. To promote skills development, the group also engages in aquaculture, recycling, cleaning services for public facilities, and removal and cleaning operations in cooperation with private real estate businesses. Nobeoka Josho Kai also engages in activities to promote awareness of mental health and welfare and it cooperates with educational institutions in accepting volunteers and students and in providing a venue for exchanges with users of the facility and students.

Recommended by Mr. Hideo Yasuzaki
 Japanese Federation of Mental Health and Welfare

平成18年6月に、特定非営利活動法人（地域活動支援センターⅢ型）となる。発足以来20年が経ち、家族会の先輩達が苦勞して築かれた礎を大切に、より活動を拡大していきたい。

延岡市には九州保健福祉大学があり心強く活動が出来る。例えば通所生の大学生への体験談講義、大学生（社会福祉学部、保健科学部）の体験学習、ピアサポーターの大学での養成講座等を実施している。少しでもコミュニケーションのとり方が向上していくことを願っている。

更に大事なことは、通所生の生活支援・就労支援の中でも、働く喜びの一つに働きの代価がある。当作業所の主収益事業は農作業である。特にハウス栽培での収穫野菜はJAで委託販売をしている。ハウス栽培での野菜の収穫は土壌管理が極めて難しく、種を蒔いても発芽しない事もあった。そのために、地域活動支援センター農業指導員養成として、宮崎県立農業大学に入寮学習させ、指導員の専門家を育成している。

その他加工品製造販売やリサイクル品回収等々行っている。

今後とも、癒やしの場作りはもとより、少しでも報酬を上げてやりたいと思っている。これらの活動は市の障がい福祉課を始めとして、保健所、社会福祉協議会、ボランティア協会、大学等のご協力とご支援そして地域住民の皆さんのご理解があつてのことである。

地域コミュニティ、特に大貫町の皆さんと家族会の先輩の業績を、今回の受賞を機に更に充実した活動に定着させたいと思っている。

生活環境の整備は高齢者はもとより障がい者の視点に立った改善が、最も大切ではないか。障がい者に住みやすい社会は、必然的に皆にとっても住みやすい社会だと思う。



コンサートの模様



ハウス内で農業に取り組む通所生



農作業後地域の皆さんと昼食のひととき



平成2年設立時の事務所作業所



さかきばら ちあき
榎原 千秋
(48歳/石川県小松市)

いのちにやさしいまちづくり
ネットワーク代表
金沢大学医薬保健研究域助教

小松市内の福祉施設で保健師として勤務していた平成8年に九死に一生を得る交通事故に遭った。リハビリ中に、ひとりのALS(筋萎縮性側索硬化症)患者と出会い支援活動を始めた。活動は難病支援にとどまらず、生と死の文化を豊かにする活動に広がり「いのちにやさしいまちづくりネットワーク」を設立。コミュニティハウスの立ち上げ・がん患者・家族の支援活動・聞き書きサークルなど、14年にわたり多彩な地域活動を続けられている。

●推薦者/秋山 正子

愛媛県宇和島市出身で、町役場、在宅介護支援センターの保健師・ケアマネとして21年携わり、2004年から金沢大学地域看護学助教。1984年に母親を脳腫瘍で亡くした経験から終末医療のあり方に疑問を持ったことが在宅ケアにかかわるようになったきっかけ。1996年交通事故で生死をさまよい、その後1年間のリハビリを経験した。居場所を失った喪失感や自己否定感を感じていたその頃、人工呼吸器を装着し在宅療養をはじめたALS(筋萎縮性側索硬化症)という難病の西尾健弥さんと出会う。西尾さんに「今一番したいことは何ですか」と尋ね、その願いを叶えるための能登旅行やホームコンサート等の支援が、ALSと仲間達という活動に発展した。

西尾さんが他界された後も、詩人の谷川俊太郎氏らを迎えて「魂のいちばんおいしいところ」のコンサートを継続してきた。コンサートに参加した方が自然にボランティアとしてかかわれるようになり、重度心身障害児の親の会のお母さんたちが活動の中心として活躍している。がん患者さんご家族、医療保健福祉従事者、市民の方々と活動が広がり「いのちにやさしいまちづくりネットワーク」となった。

病気や障がいを持ったとき自分の人生に新たな価値を見つける希望を持ち、自己表現や創造性を励ますしくみが必要と考えている。相談窓口や拠点を持たないわたしたちが目指すのは、ホスピタリティなもてなしの心にあふれたまちづくりである。いのちのスープの会、いしかわ

Chiaki Sakakibara (Age 48/Komatsu, Ishikawa Prefecture)

Working as a health nurse and running a maternity center in Komatsu City when she had a near-death experience in a traffic accident, Ms. Sakakibara experienced first hand what it was like to spend a long time in a hospital bed. After meeting a patient suffering from ALS (amyotrophic lateral sclerosis), she began her activities to assist people suffering from intractable diseases. She then went on to design a concept for a community house in the area for deepening the understanding of people in the community of the meaning of life and death and she established a society for openly discussing palliative care for cancer patients. She also established "a community network caring of life," and has continued her activities over 14 years as its representative.

Recommended by Ms. Masako Akiyama

聞き書き長屋、金沢大学聞き書き*サークル「星ことば」、がん患者さんと家族の声からつくる支援のかたちプロジェクト、いしかわ在宅緩和ケアを語る会のひとりひとりの活動が、その役割をはたしている。

マギーズ (Maggie's)

がんになっても希望を持ちたい、そして当たり前の生活を大切にして暮らしていきたいという願いをかなえるための支援のかたちを探しています。2010年2月にマギーズ*の代表ローラ・リーさんらをお迎えし講演会を開催。

「あなたはがん患者ではなく、ひとりの価値ある個人である」という姿勢は、わたしたちの願いそのもの。よき理解者を増やしつつ、そのプロセスを大切にしながら、いつかマギーズを実現したい。



■ 榎原さんをお供でお仲間と



■ がん患者さんと家族の声からつくる支援のかたちプロジェクトのメンバー

*「聞き書き」とは、ひとりの人の人生の語りを聞いて、語り手の言葉をそのまま文字として記録し後世に残すこと。「聞き書き」には、人と人が出会い、つながり、何か新しいもの創り出すエネルギーがある。

*マギーズ (Maggie's cancer caring centers)

造園家で中国庭園の研究者でもあった故マギー・ケズウィック・ジェンクス(1988年乳がんの宣告を受け、1995年多臓器がんで死去)の遺志を受け、がん患者・家族、また友人に至るまで様々ながんの悩みに応える無料相談支援施設として、1996年にイギリスのエジンバラに1箇所目が開設された。(イギリスのNHS=公立病院の「がんセンター」の敷地内に、「別棟」(院外)として設置、全額チャリティ&他の運営主体により運営)



きりう せいじ
桐生 清次
(76歳／新潟県新発田市)

新潟県胎内市や新発田市の中学校で特別支援学級の担任をされながら、知的障害者の施設建設や就労問題に取り組んだ。平成6年に定年退職と同時に胎内市にある知的障害者の通所授産施設「虹の家」の園長となった。利用者の人権と人格を尊重した運営と主体性と自主性を重んじた作業体制を組み上げ、企業と行政と施設が協調し、胎内市周辺などに協力企業を含む5ヶ所の施設を作り180人以上を受け入れるなど知的障害者が笑顔で働けるための活動を40年にわたり続けられている。

●推薦者／川野 楠己

社会福祉法人 七穂会 理事長・
虹の家 施設長

昭和55年4月中学校の教え子たちのために創設した中条福祉作業所は、平成元年に法人化され定員30人の虹の家に発展し20年経った現在、利用者は70人を超えています。

平成6年4月定年退職と同時に虹の家の施設長に迎えられ、障がいの重い軽いや年齢や定員に関係なく希望者はみな受け入れ、新しい施設3つと協力企業やグループホームなどを作り、近隣市町村に7台の送迎バスを走らせ、利用者は合計、180人を超えています。

特に旧中条町が土地を提供し、大手化学企業が作業所をつくり指導員を雇い障がい者を雇用、虹の家が指導、援助を提供する3者事業提携による全国初めてのトロイカ方式は成功し、企業は20人を雇用、14年目を迎えた現在離職者は一人もいません。

虹の家は利用者の人権と人格を尊重し、利用者中心の運営を行っています。そのため学校退職教員（現在も4人採用）を多く採用し、職員の研修と実践を重視しサービスの充実に力を入れています。全体作業として毎週1回市からの空ビンの分別作業。また、自家作業や企業の委託作業も多く、目的を明確にし作業は利用者の希望選択制です。それに毎日のようにボランティアも来ています。年間延べ約1,000人。現在まで総計16,000人を超えています。

虹の家は、平成7年より利用者の主体性・自主性を重んじた自治会を設け「楽しい虹の家にしよう」を目標に、役員選挙も行い、生活委員会、奉仕委員会など6つの委員会をもうけ、自分たちで計画を立て実践し運営に参加しています。また、地域への奉仕活動として毎年、市内

Seiji Kiryu (Age 76/ Shibata, Niigata)

While working as a teacher for special needs classes at a junior high school as well as a lecturer at university in Niigata Prefecture, he also took up the issue of intellectually challenged persons entering the workforce. Upon his retirement in 1994, Mr. Kiryu became the director of the Rainbow House, an ambulatory vocational aid center for the intellectually challenged. Through a cooperative arrangement among companies, the government and Rainbow House to engage the center's users as company employees, Mr. Kiryu succeeded in establishing centers in four locations around Shibata City which engage over 180 people.

Recommended by Mr. Kusumi Kawano

の幼稚園や市の水道公園など、平成15年からは絶滅危機にあるイバラトミヨの住む、湧き水の里の清掃活動など毎年実施しています。それに平成7年阪神淡路大地震から国内外に災害が起きるたびに街頭募金活動を行い、被災地に送ってきた義援金は合計280万円を超えています。そのため虹の家の運営や利用者の自主的な活動は評価され、毎年小学生から大学生、教職員、企業の新入社員など研修生や他市町村からの民生児童委員など視察研修者など、現在まで延べ3,000人を超えています。また虹の家は地域との交流を深めるために胎内市の祭りの民謡流しなど毎年多くの行事に参加していますし、虹の家でも毎年、行政や企業や地域の皆さんを大勢お招きし感謝祭を行っています。今日の荒れた社会の中で純真で素直な利用者の心を世の光としてこれからも共生社会の実現に努力していきます。



虹の家の全景



朝のミーティング



見学者への代表挨拶



作業風景



たかみ くに お
高見 国生

(67歳/京都府京都市上京区)

認知症の人とその家族に対する施策や制度のないなかで、昭和55年に日本初の「認知症介護家族の自助集団の会」を京都市で発足させ、設立以来30年の長きにわたって家族を励まし、支援を続けられている。現在45都道府県の支部、会員は1万人にのぼる。

●推薦者/財団法人 京都オムロン地域協力基金

公益社団法人
「認知症の人と家族の会」代表理事

私と「家族の会」の記録

私を5歳から育ててくれた母（養母）に認知症の症状が現れたのは1973年ころでした。症状は次第に進行し、ついに失禁、なんでも食べる、私に向かって「どちらさん？」というまでに。

共働き、育児中の私は日々の介護で、もう限界と思い始めました。当時は、認知症への理解は少なく、医療にも福祉にも対応してもらえず、行政の対策も皆無でしたから、介護は家族だけの力でせざるを得ない状況でした。

そのような状況の中、家族を支援しようという医師やボランティアに巡り会い、京都の20家族ほどで家族の会を作ることになりました。1980年1月、京都で「呆け老人をかかえる家族の会」の結成総会を開いたのですが、そのことを小さな新聞記事で知った家族が東京から九州から90人も集まりました。京都だけの集まりのつもりであったのが、突然に全国の集まりになってしまったのです。

京都だけで行っていた家族のつどいは、こうして全国に広がり支部となり、現在では45都道府県に支部ができ、会員は1万人を超す組織となりました。

認知症の人の介護は、やってみなければ分からないと言いたいほど大変です。ですから、家族どうしの励ましあい助けあいを大切にしてきました。つらい介護でも仲間がいることによって勇気をわかせることができるからです。それとともに、社会に理解してもらい行政の対策を進めてもらうことにも力を入れてきました。

これまで、厚生労働大臣に35回の要望や提言を行ってきました。また社会の人たちに認知症を理解してもらうために実情を訴え、講演会なども開催してきました。

2004年に開催した国際会議には世界66ヶ国から4,000名を超える参加者があり、認知症の本人が思いを語ったことにより、理解が飛躍的にすすみ、それまでの「痴呆」という言葉が「認知

Kunio Takami (Age 67/ Kamikyo-ku, Kyoto, Kyoto Prefecture)

At a time when there were no measures or systems in place for people suffering from dementia and their families, Mr. Takami in 1980 established the first self-support group for families caring for family members suffering from dementia in Kyoto. Since then, Mr. Takami has provided encouragement and support for families for more than 30 years. Today membership has grown to 10,000 spread over 45 prefectures.

Recommended by the Kyoto Omron Regional Support Foundation

症」に替わりました。「家族の会」も「認知症の人と家族の会」に改称しました。

「家族の会」が長年訴えてきた介護の社会化は、2000年の介護保険制度の誕生によってその一歩を踏み出しました。「介護は家族の責任」という風潮が、「介護は社会で支えるべき」という認識に変わり始めました。認知症の人は何もできない何も分からない人ではないということが明らかになり、認知症は特殊なものでなく誰もがなりうる病気、という理解も進みました。この時代を私たちは「認知症新時代」と呼んでいます。

社会の高齢化に伴い、認知症の人はいっそう増えると予想されています。10年を経過した介護保険制度は来年に法改正が行なわれます。現在だけでなく将来の認知症の人と家族にとっても、役に立つ改正が行われるように働きかけています。私たちが願う「ぼけても安心して暮らせる社会」に近づけるために。



結成30周年を迎えた今年の総会
2010年6月京都市京都会館

各地で家族の集いを開く
1987年2月広島県支部の様子



介護保険改善の提言を厚労省に申入れ
2007年11月 NHKニュースから



京都・岡崎で結成総会
全国から90人が参加1980年1月



うえのかずひこ
上野 和彦

(58歳/愛知県日進市)

幼少時に大やけどを負い、熱傷をもって生きる困難さを身を持って体験した理容師で、全国の熱傷体験者とその家族への頭髪、整肌に関する無料出張相談やニーズにあったかつらの製作など、36年にわたり活動を続けられている。相談件数は4万3千件ののぼり、5千人近いかつらを製作されている。

●推薦者/日本熱傷ボランティア協会

日本熱傷ボランティア協会 会長

活動の契機

私は、幼少のころ、実家の囲炉裏に落ち、頭髪の半分を失う大やけどを負った。このため熱傷を持って生活していくことの困難さを、身をもって体験している。その後、ヘアーの世界に身を投じ、やけどの後遺症に悩む人たちからのかつらづくりとそのケアにも取り組んできた。

自分の体験から、熱傷患者が持つスティグマが非常に強いものであり、社会的生活ができない人や自立した生活を行えない人を救いたいと考えていた。また熱傷に関する認知度の低さを鑑みて、まず相談する相手もないという実情を知っていたからこそ、誰もいないのであれば自分が行おうという強い意志の元に活動を開始した。

昭和48年1月熱傷体験者とその家族への奉仕活動開始、頭髪・整肌の無料相談、カウンセリング活動など熱傷体験者とその家族へ出張相談を実施している。

軌道に乗るまでの苦労、現在の状況

本業の傍ら、ボランティア活動にも打ち込んでいる。クリニックが休みの日は「出張無料相談」のため全国に出かける。人目を避けたい人が多いため、こちらから出向くことが多い。「交通費ももらわない。人助けがしたいだけだから。金もうけを考えたら、初心を曲げることになる」これまで36年間、私がボランティアで相談に乗ったのは、約4万3,000人。

熱傷治療自体については形成外科が実施するが、それをサポートするかつら作りやカウンセリングなどは医療の現場からも重要視されている。

Kazuhiko Ueno (Age 58/Nisshin, Aichi Prefecture)

A hairdresser who received serious burns as a child and experienced first hand the difficulty of living with burn injuries, Mr. Ueno offers free on-site hair and skin consultation for victims of burn injuries and their families all over Japan and creates hairpieces to meet their individual needs. Mr. Ueno has been providing this service for over 36 years and during this time has provided consultation for about 43,000 people and produced close to 5,000 hairpieces.

Recommended by Japan Burn Injury Volunteer Association

今後の進め方

医療ではやけどの治療はできても、心のケアまでは難しい。

(病院訪問活動) 熱傷センターのある大学病院等と連携し、熱傷体験者への案内、相談活動等の支援を行なう。

かつらは保険がきかないので、今後は保険の適用を目指して活動を続けていきたいと思っています。



相談者に丁寧にカウンセリング

2010年9月25日 中部経済新聞



無料出張相談の様子
東海TVスーパーニュースで放映





代表 篠原 鋭一



長寿院 (成田市)

ほうじん じ さつ ぼう し かせ
NPO法人 自殺防止ネットワーク風
 (千葉県成田市)

平成4年頃、成田市の僧侶である代表者のもとに自死を示唆する人が訪ねて相談に来るようになったことから、相談活動を始めた。その後NPO法人を結成し、各地で独自に自死防止活動に取り組んでいる僧侶の方々43ヶ寺が宗派に関係なく24時間対応のネットワークの相談所を担い自死防止活動を続けられている。

●推薦者／社会福祉法人 輝雲会
 愛川すすくすステーション「手まり学園」
 理事長 藤木 隆宣

活動の契機

代表の篠原鋭一が、およそ二十年前に、自死志願の青年の訪問を受け、八ヶ月間寝食を共にしながら再び生きる道へと進ませたことが、口こみで、地方新聞で公表され、日毎に相談者が増えて行ったことがきっかけでした。

今年8月までに約七千人の自死志願者と面談を行っています。

軌道に乗るまでの苦勞

覚悟の上始めたことですから苦勞とは言えませんが、自死防止活動に対しての無関心無理解は日本社会独特のものがああり、死を見つめておいでの方々たいへん悩んだ末に訪問されるという、いわば窓口のハードルを低くでき得ない現実に試行錯誤の毎日でした。

対話活動実行のポイント

- | | |
|----------------------|---------------------|
| ①とことん聞く | ⑥高齢者はこちらから訪問する |
| ②時を問わない | ⑦精神科医師との連携を深める |
| ③まるごと受け止める | ⑧イベントへの参加による人間関係づくり |
| ④友達になる・上下関係をつくらない | ⑨宿泊希望者も受け入れる |
| ⑤相談者から先へ向かう言葉が出るまで待つ | ⑩地域の理解を得る |

皆さんにお願いします

自死は「自己責任」ではなく「連帯責任」です。

“Kaze” (Wind) NPO Suicide Prevention Network (Narita, Chiba Prefecture)

Around 1992 a number of people started visiting the founder of this NPO, who is a Buddhist priest in Narita City, indicating that they might commit suicide. This prompted him to start telephone consultation services. After receiving NPO accreditation, the priest approached fellow priests all over Japan, who were already engaged in individual initiatives for the prevention of suicide, to seek their cooperation. Currently 23 temples in 17 prefectures in Japan operate a 24-hour consultation network service for the prevention of suicide for all people regardless of religious sect. Recommended by Mr. Takanobu Fujiki, Director, Social Welfare Corporation,

Recommended by Mr. Ryusen Fujiki, President, Kiun Kai

我々は自殺の問題を考える時に2つ、これだけは覚えておかなければなりません。この自殺問題というのは、人ごとではなく、我々連帯責任において解決しなければならない問題であるということ。そして、人間というものは孤独ではまだ死にません。孤立をしたときにこそ、本当に自らの命を絶つしか方法はないなというところまで行くんだと。だから、我々は常に孤立をしない状態、孤立をさせてはいけない環境をお互いつくり合うことこそが今必要なのです。だから、寄り添うのです。ときには温かな心優しいおせっかいを焼くのです。命を絶つ、あるいは自ら命を絶ちたいと思っている若者に言うのです。「とにかくちょっと待とうよ」と。

どうかめんどくさいと思わないで「対話」を実行して下さい

- 関心を持つと同時に行動に移して下さい。
- 若者へ「慈愛のおせっかい」をやいて下さい。
- 孤独な高齢者に「お元気ですかコール」を発信して下さい。

人生は一人では生きられません

人間は、この世で生を受けて、そして人間として生きる。ということは、自分以外の人との関わりによって生きる。ならば人に迷惑をかけないで生きられるわけがないんです。迷惑をかけたらいんです。ただそこで止まってしまっただけで、人間というのは、人に迷惑をかけないで生きられるわけではないのだから、逆に人からの迷惑も喜んでいただきなさいという、ここを合わせて迷惑をかけたりかけられたりして生きるのが人間なんだという関係です。ところが、この関係がぷつんと切れてしまって、初めにお話しをした孤立という状態になって、そこから死という選択が出てくるんです。

どうか皆さん、身近な方々に自死という、命を絶つということが起きるような環境を何とかお互いの手によって壊していきましょう。お互いにこの世に命をいただいたんですから。若いお母さんは子どもを「つくる」とおっしゃるけれども、子どもはつくるものじゃないんです。命は授かるものなんです。

どうぞこの授かった命を、自分も自分以外の人も大切に大切に、二度とない人生を生き抜けるような社会をお互いがつくりたいと思います。

今後の課題

1. 中学生、高校生ぐらいからの「いのちの重さ」「いのちの大切さ」についての教育をしましょう。
2. 地域のコミュニティの再生。祭りやイベントによって地域社会で共生する。お互いの顔が見えるような環境を作りましょう。
3. 「自死を考えている人」「うつ病などで苦しんでいる人」「自死遺族の方」に対する偏見や差別意識を持つ地域社会を作ることはやめましょう。
4. いつでも気軽に相談できる窓口や安心して話のできる相談員を市町村に増やしましょう。電話一本あるだけで多くの人々が相談できます。

※皆さまのご理解とお力添えを心よりお願い申し上げます。



対面で話を聞く篠原代表

平成22年4月8日 河北新報





理事長 日下 忠文

しゃかいふくしほうじん ちば でんわ
社会福祉法人 千葉いのちの電話
 (千葉県千葉市中央区)

平成元年に「日本いのちの電話連盟」の33番目のセンターとして設立されて以来、一人でも多くの自殺を防ごうと、約300名のボランティアが24時間体制で悩みの電話相談に当たっている。設立以来受け付けた相談数は計46万件以上。インターネット相談、対面相談も行っている。自殺者の遺族が互いに支え合う会「ひだまり」も主催されている。

●推薦者/千葉県いのちの電話協会 会長 安田 敬一

このたびの栄えある受賞を、心から喜び感謝申し上げます。この受賞は、これまでの20年間に参加いただいた相談ボランティア又、活動をご理解・ご支援下さった多くの皆様のお陰であると考えております。

これからも自殺予防のボランティア団体として、日々の研鑽を通じて資質の向上を図っていくとともに、新しい課題にも取り組み、この活動を続けてゆくことを祈念しております。

1989年10月1日、千葉市で電話相談を開始、1993年1月「社会福祉法人 千葉いのちの電話」の認可を受けました。現在約300人の相談ボランティアが24時間365日電話相談にあたっています。新たな援助活動を推進するための拠点として、2007年6月新会館CIDビルに移転、2006年自死遺族支援事業、2008年インターネット相談、2009年対面相談を始めました。

自殺予防 ひとりで悩まずに…話してみませんか

精神的な危機に直面し、死にたいほどの想いを抱えている方が、自ら生きる力を回復できるように、いかなる思想、信条、宗教に偏らない相談活動している、無償のボランティア団体です。理事会、評議員会、事務局を設置し、ボランティアによる委員会を構成し、研修・財務・事業・広報などの活動をして円滑な組織運営を推進しています。

電話相談

誰にも話せず、ひとりで困っている。生きていく自信をなくした…。心の相談、あなたの寂しさを受け止めます。

Chiba Inochi no Denwa Social Welfare Corporation, (Chuo-ku, Chiba, Chiba Prefecture)

Since the establishment of Chiba Inochi no Denwa (Lifeline) as the 33rd center of the Federation of Inochi no Denwa Inc. in 1989, about 300 volunteers have been providing telephone consultation 24 hours a day for distressed people in efforts to save as many lives as possible. Since its establishment, the Inochi no Denwa has received more than 460,000 calls from persons seeking consultation. The service also provides online consultation via the internet and face-to-face consultation. Chiba Inochi no Denwa also sponsors a mutual support group called the “Hidamari” (Suntrap) for families of people who committed suicide.

Recommended by Mr. Keiichi Yaduda, Chairman, Chiba Inochi no Denwa Association

わかちあいの会 ひだまり 自死遺族支援

大切な人を自死で亡くした…。自分を責めたり…。深い悲しみをかかえて…。その想いを安心してわかちあえる場所があります。

インターネット相談

なんとかしたいけど、誰にも話せない、人と話すのが怖い…。今の気持ちを伝えられたら…。あなたの想いをつづってください。

対面相談

生きがいを見出せない。職場、地域、子育て、人間関係…。

心のバランスが崩れそう…。

あなたの心の想いや悩みをお話ください。

相談員になるには、毎年開講している「電話相談ボランティア養成講座」を受講していただきます。



ネット相談



電話相談室



研修の様子



研修の様子



相談員認定式



しげ ゆき お
茂 幸雄

(66歳／福井県福井市)

福井県の東尋坊を管轄する警察署で勤務するなかで、同所で年間20名以上も自殺者が出る現実を目の当たりし、定年退職後の平成16年から、同所で相談所「心に響くおろしもち」を活動の拠点に自殺企図者を保護する活動をしている。会員のパトロールにより自殺企図者を保護した後の生活支援、自立支援などの自殺防止活動に取り組み、300人近くの命を救われるとともに福井市内にNPO法人「心に響く文集編集局」を結成され、自殺を防止する活動を続けられている。

●推薦者／福井こころの電話 代表 浦田 光寿

NPO法人
心に響く文集・編集局 代表

『福井県・東尋坊での自殺防止活動』

みなさん、福井県の東尋坊（とうじんぼう）という場所を御存知でしょうか・・・？

この東尋坊へは全国から終焉の場として多くの人が集まってきており、過去30年間に646人、ここ10年間に227人が日本海に向かって飛び込み自殺をしており、毎年200人以上が自殺未遂者として保護され、そのうち約8割の人が県外者です。

私は、平成15年度に42年間の警察官勤務を終える最後の1年間を東尋坊を管轄する三国警察署(現坂井西警察署)で勤務し、多くの自殺者の死体を検視し、多くの遺書を読み、多くの自殺企図者から悩み事を聞いてきました。また、自主的に毎日のように東尋坊をパトロールしていた時、東京から来た老カップルの自殺企図者と遭遇し行政機関に引継いだものの思いが叶わず新潟県で自殺してしまった事案も発生しました。

この様に多くの自殺企図者から話を聞いて分かったことは、全員が「まだ、死にたくない・・・」「誰か、助けて欲しい」「出来るものなら、もう一度人生をやり直したい」と叫んでいたのです。

この助けを求めている人たちを救う行為は“人命救助”であると思っています。

私は定年退職を機に東尋坊での自殺防止活動をする事を決め、多くの仲間を募って平成16年4月にNPO法人を立ち上げ、現在86人の会員さんとともに日夜パトロールを続け、今日(10/1)までに288人の自殺を水際で食い止めてきました。

Yukio Shige (Age 66/ Fukui, Fukui Prefecture)

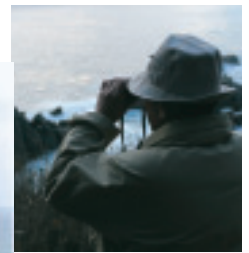
During his years of employment at the police station that has jurisdiction over Tojinbo in Fukui Prefecture, Mr. Shige witnessed the reality that more than 20 people were committing suicide every year in Tojinbo. Since his retirement in 2004, he has been involved in various activities including patrols to prevent suicides and provide support and shelter for would-be suiciders in everyday life and in becoming self-supporting. During this time Mr. Shige has helped save the lives of over 270 people.

Recommended by Mr. Mitsutoshi Urata, Representative, Fukui Kokorono Denwa

私たちと遭遇した自殺企図の皆さんは、リストラや一家離散、借金による苦悩など、その理由は様々ですが、この悩み事を解決するために関係機関や職場・家庭の中まで付き添う同伴活動もしており、その悩み事の解決に向けたお節介もしてきています。

彼らは常に、「支えてくれる人」「頼れる人」「逃げ場所」を求めています。しかし、それが叶わないために天国を目指してしまうのです。私は“この世に逃げ場”を創ってあげなければならないと思っています。また、自殺を考えている人たちのストレスや悩みなど、彼らが背負っているさまざまな荷物を一つでも良いから取り除いてあげなければ自殺は減らないと思うのです。

「健康で生きがいを持って暮らすことのできる社会」の実現に向けて官民が一体になって取り組まなければならないのであって、私も微力ではありますが今後もこの活動を続けていきたいと思っています。



東尋坊をパトロール中



「こころに響くおろしもち」店の前で





理事長 杉浦 裕

とくてい ひ えい り かつ どう ほう じん
特定非営利活動法人
 がい こく じん い り ょ う
外国人医療センター
 (愛知県名古屋市中村区)

言葉や法律の壁により不利益な立場に陥りやすい状況にある外国人の医療支援を目的とし、平成10年に名古屋市に設立された。外国人無料健康相談会、電話・メールでの情報提供、啓発活動など行い、なかでも外国人無料健康相談会は、医師、歯科医師、看護師、通訳などの専門職種も含め、年間延べ人数約230名のボランティアの協力を得ながら、通算145回、延べ人数2095名の相談者に対応されている。

●推薦者/杉浦 裕

平成22年度の社会貢献者表彰授賞に浴し、これまでご支援、ご協力をいただいた関係各位に心から感謝します。

思い起こせば15年ほど前、愛知の地で滞日外国人の人たちとの共生を目指す全国集会が開かれました。医療の問題も大変だねという話がされ、東チモールで亡くなられたレナト神父の活動に参加されていた人たちが、今は稲沢で開業されている山田先生をはじめとする医療関係者が集まって、外国人医療センターの活動が始まりました。最初は、医療相談や総会のときの市民集会が中心でした。段々、愛知県の外国人向けの医療情報ホームページや電話情報の作成、県下各地の医療相談会の開催、最近では外国人向けの介護ヘルパー教科書の翻訳なども行うようになりました。理事にも弁護士、歯科医師など各界の方たちの参加を得られ、事務所も何とかもてるようになりました。これも偏にご支援、ご協力をいただいている多くのボランティアの方たちのおかげです。

最初のころは、オーバーステイの方の相談や時に命に関わる事例相談もありました。その後は、ブラジルの方が増え、最近はそれも減って、定住する子供たちの相談や、研修・実習生の健診の「下請け」など、世相を反映した内容になっています。今後は、問題となっている医療通訳育成なども関係者と協力して進めていきたいと考えています。

NPO Medical Information Center Aichi (MICA) (Nakamura-ku, Nagoya, Aichi Prefecture)

The Medical Information Center Aichi (MICA) was established in Nagoya City in 1998 to provide medical support for foreigners who are apt to be in a disadvantageous position due to language or legal barriers. The center provides services such as free health consultation, medical-related information by telephone and e-mail, and activities to provide information to foreigners. Free health consultation is provided with the cooperation of about 230 volunteers annually including specialist doctors, dentists, nurses, and interpreters. These services have been provided 145 times for 2,095 people in total.

Recommended by Mr. Hiroshi Sugiura

ずっと理事長として外国人医療センターを支えていただいた村地先生から理事長の役をひきついで日が浅いのですが、私も病を得て、次の世代にいずれ活動を託すことになりました。体の許す限り、外国人、日本人の枠にとらわれることなく、地域でともに生きていくことを支える活動を続けていきたいものです。



無料相談会の様子



外国人健康相談会会場





メンバー 小城 公明

ぶい ごーど
V・GOLD
(北海道旭川市)

盲導犬の育成一頭に500万円かかるといわれるが、その内の75%を寄附に頼っていることを知った北海道の税理士有志が、平成13年にバンドを結成し税理士会として募金活動をスタートした。途中メンバーも変えて再結成し目標額に達成した事から税理士会と切り離して以後、独自に募金活動を推進し、旭川市を中心にこれまでに13回のチャリティーコンサートを行い、通算150万円を寄付するとともに道内の刑務所の慰問も行なわれている。

●推薦者／公益財団法人 北海道盲導犬協会
会長 志田 恭司

1998年北海道税理士会旭川支部の社会貢献事業として盲導犬育成募金活動が始まった。当時から盲導犬を必要としている視覚障害の方が全国で8000人弱もおり、対して約1000頭しかユーザーの皆様には渡っていない状況であり、特に雪が降る北海道の冬を考えた時、盲導犬育成のお手伝いは大変重要な事であり、「旭川冬祭り」が開催される2月に支部会員が雪像を作り、その場所で“ミーナの募金箱”を持って活動を始めました。

一頭の育成費用500万円を10年計画で達成しようとスタートした訳ですが、当初はもの珍しさもあって目標通り募金も集まりましたが、景気の低迷とぶつかり年々募金が減り続けた事から、夏のイベントもやろうという事になり、佐々木正行会員の発案によって1960年代日本中で一大ブームになったベンチャーズのコピーバンドを2001年会員有志で結成し、夏冬のイベントで募金目標額を達成する事が出来るようになりました。この2本立で翌年以降も大丈夫と思っていた矢先、2人のメンバーが相次いで本州に異動してしまい、解散する事になり意気消沈していた時、運よく別々のバンドで活躍していた高野正夫君と中野雅州君と出会い、2003年「V. GOLD」を再結成する事が出来た訳です。二人の力量は高く、特に高野君は学生時代青江美奈さんのバックバンドをやっていた位なので、以後は私一人が他のメンバーの足を引っ張っているのではと冷汗が続いています。

こうして盲導犬チャリティーライブは本格的に続いて来た訳ですが、もう一人とても大切な

V Gold (Asahikawa, Hokkaido)

The training of one guide dog for the blind is said to cost five million yen. In 1998 when a group of accountants in Hokkaido learned that 75% of the cost relies on donations, they decided to form a band and started fund-raising activities. Once when they achieved their target amount, they disbanded the band but it was later reassembled with different members and held 13 charity concerts in the vicinity of Asahikawa City. In addition to donating 1.5 million yen for guide dog training, the band also holds concerts at prisons in Hokkaido.

Recommended by Mr. Kyoji Shida, Chairman, Charitable Organization;

Recommended by Hokkaido Guide Dogs for the Blind Association

人との出会いがこの活動を一層勇気づけてくれています。その方は団塊の世代の人なら誰でもお馴染みの3人娘、中尾ミエ、園まりそして伊東ゆかり、「小指の思い出」と言えばお分かりと思います。その伊東ゆかりさんと評論家の竹村健一さんを通じて10数年前から知り合い、ゆかりさんは犬の犬好きという事もあって、冬祭り会場で一緒に何度か募金箱を持っていただく事が続き、2007年には信じられない事に「V. GOLDのメンバーとなら盲導犬チャリティーライブをやってもいいわよ」と話が弾み以来、手弁当で3回もお手伝いをいただき感謝すると同時に、つくづく人のご縁の有り難さを実感しております。

2006年に税理士会旭川支部として目標を達成したのを区切りに、翌年からは「V. GOLD」として独自に盲導犬募金活動を始め、刑務所慰問も含めて70歳まで友情をキーワードに、老いを忘れて楽しみながら燃え切ろうと決意を新たにしている所です。



2008年カムイ号引き渡し



2010年イベントのパンフレット



屋外チャリティーライブ風景



伊東ゆかりさんとチャリティーライブ



さかうえ かずこ
坂上 和子
(56歳／東京都江東区)

NPO法人
病気の子ども支援ネット
遊びのボランティア 理事長

新宿区の国立国際医療研究センターで、保育士としての経験を活かし、親や看護師からの要望もあり、平成3年に同センターに「遊びのボランティア」を設立。多くのボランティアを養成しながら、昨年度は年間161回、同センターを訪問し、延べ807人の子どもに対して、ボランティア延べ944人が参加し、病気の子どもとその家族を支える活動を続けられている。

●推薦者／東京ボランティアセンター・市民活動センター
所長 山崎 美貴子

新宿区の在宅訪問事業で保育士として国立国際医療研究センターに行ったのが、病気の子どもたちとの最初の出会いでした。プレイルームにおもちゃはなく、子どもたちはテレビをなんとなく見ているだけ。寒々しい環境に驚きました。小さい子どもがベッドの柵につかまって「ママ～」と声を枯らして泣いていたり、たいくつそうにテレビを見ている子どもたち。そんな環境に私たち二人の保育士が背中にリュック、両手に手提げ、おもちゃをたくさん詰めて運びました。あるとき、プレイルームの床に青いシーツを敷き、海に仕立てました。布製の手作りの貝や魚を置き、釣竿の先と魚にはマジックテープがついて魚が釣れる仕掛けです。ビーズや刺繍の入った魚を見て子どもたちは目を輝かせ、「ワア～、大きいのがつれたよ」、子どもたちの歓声がプレイルームいっぱいに沸きあがりました。病気になってもいっぱい遊びたいのが子どもです。

そのうち、新宿区は事業の対象児が退院したので訪問保育を終えることにしました。すると残ったお母さんたちが区長に、事業継続のお願いをしました。脳腫瘍や白血病など、重い病気の子どものお母さんたちの願いに、区は「新宿区民でないから」と断りました。それならボランティアでと職場の仲間呼びかけ、遊びのボランティアを立ち上げました。1991年のことです。当時はおもちゃ図書館からおもちゃを借り、自転車に積んで病院に通いました。最初6人のボランティアが今では70余人。主婦、大学教員、保育士、元看護師、学生など多様な人々が参加。5割が社会人で5割が学生です。2009年度の活動は31床の病棟で年間161回、子ども延べ

Kazuko Sakaue (Age 56/Koto-ku, Tokyo)

Making the most of her experience as a visiting carer for hospitalized children at the National Center for Global Health and Medicine, Ms. Sakaue at the request of parents of children and fellow nurses established the Play Volunteers as a support network for sick children within the center in 1991. While training many volunteers, the group paid 161 visits last year to different hospitals in Tokyo including the National Center for Global Health and Medicine. In all, 944 volunteers participated in visits to 807 children, and the group is continuing its activities to provide support for sick children and their families.

Recommended by Ms. Mikiko Yamazaki, Director, Tokyo Volunteer Action Center

807人にボランティア944人が関わりました。子どもは点滴がついていたり、乳幼児も多く一人、一人に手ががかかります。ボランティアの数が子どもより多いのが特徴です。

この活動は最初から道があったわけではなく、モデルがあったわけでもありません。最初の頃は「今日、遊べる子はいません」と看護師に言われ、病室に入れてもらえなかったこともありましたが、でも、面会時間が終わるとお母さんは帰ってしまう、寂しくて泣いている子ども、遊びたいと言えない子どもたちが中にいました。そんな状況を放ってはおけません。ボランティアを養成し、19年間無事故をつらぬき、今では医療スタッフや家族から深い信頼が寄せられています。定期的な土曜日の活動に加え、平日も長期入院の必要な子どもの個室を訪問するほか、クリンルームやICUなどでも子どもと家族に寄り添います。亡くなった子どもの家族に対しても交流を続け、さらに在宅のボランティア派遣も始めました。

1998年と2005年にはアメリカ・カナダの子ども病院を視察し、海外の活発なボランティア事情を日本に紹介。2006年にNPO法人を立ち上げました。「病気の子どもへの社会支援」や「柳田邦男さんと考える子どもの緩和ケア」などをテーマにフォーラムを開催し、活動の重要性を訴えてきました。2010年、病院のすぐそばに1室を借りました。24時間病室に付き添うお母さんたちを応援したいと、おばあちゃんちのような憩いの場「ハウス・グランマ」をオープンしました。でも行政の補助も受けられないNPOにとって高い家賃をいつまで払い続けられるかな？不安いっぱい挑戦が続きます。



■ クリンルームでオセロ



■ プレイルームで遊ぶこどもたち



■ プレイルームに出られない子に本を読む



■ 季節の行事も楽しみ



うちだ かずこ
内田 和子
(70歳／東京都八王子市)

NPO法人
養育家庭の会 みどり支部 支部長

養護施設を退職後、里親登録し里親としてのキャリア22年。八王子市で昭和63年に3歳の子どもを受託されてから「里親として子どもをきちんと育てたい。子どもの数の多さより、責任をもてる範囲で養育したい」という信念で10人の子どもを大切に育てられた。昨年度からファミリーホームの認可を取得。またNPO法人東京養育家庭の会のみどり支部に属し、後継者を育て、地域の人々の触れ合いを活性化するなどの活動も続けられている。

●推薦者／武井 優

この度は、社会貢献者表彰をいただく事になり大変に驚いています。これまで晴れがましい舞台には縁がなく、思いがけなく大きな歴史のある賞を頂くことになるとは予想もしていなかったもので、身が縮む思いをしています。

思い起こせば39年前、9回ほど遠回りして短大に入学しました。それまで中学卒業後、郷里で看護助手をしていましたが、これからは女性も手に職をつけたほうが良いと言われ、上京し保育士を志しての入学でした。しかし学び、実習を経験する中で、児童養護施設職員の道を選びましたが、5年位働く中で施設養護の限界を感じてドイツに行き、養護施設で約2年研修を積みました。その際に地域の中で家庭のように少人数で運営されている施設に出会い「これだ!」と思いました。

帰国後に結婚し、施設の中に家庭的な雰囲気を取り込もうと努力しましたが、さらに限界を感じる事が起きました。ある日、施設の中で子どもに「先生は帰る家があっていいね。帰ったら自由なんでしょ。」と言われた事に、胸を大きくえぐられる思いがしました。どんなに頑張っても家庭ではない。子ども達、特に小さな子どもたちには家庭が必要なのだ、と痛いほど感じた出来事でした。

15年勤めた児童養護施設を退職して里親になり、今年で23年を迎えます。今日まで10人の子ども達と出会い、現在は小学校から高校生まで4人の子どもと生活を共にしています。育ちあがっ

Kazuko Uchida (Age 70/ Hachioji, Tokyo)

After retiring from her job at a care facility, Ms. Uchida registered as a foster parent and now has 22 years' experience in that capacity. Since she was first entrusted with the care of a three-year old child in 1988, Ms. Uchida has brought up 10 children. She accepts her role with the conviction and desire to do her best as a foster parent by nurturing children to the extent that she can look after them responsibly rather attempting to look after a large number of foster children. Ms. Uchida obtained accreditation for operating a foster family home last year. She also belongs to the Midori Branch of the Tokyo Foster Family Association where she trains new foster parents and continues activities to revitalize personal relationships within the local community.

Recommended by Mr. Yu Takei

た元里子の娘は特別養護老人ホームで働きながら、休みの日には実家のように我が家に寄って、下の子ども達の面倒をみてくれます。

夫は私が里親をしたいと言った時も、すんなりと受け入れてくれた穏やかでやさしい人で、無理がたたって倒れた時もありましたが、悩み、戦い、奮闘があったからこそ、子どもと一緒に夫婦共々成長できたと思っています。

この間、平成14年に創設された養育家庭支援員として4年位里親さん達の相談に応じ、児童相談所と連携を取り交流会を催すなど務め、同年新設された専門里親の研修を受け、専門里親にも登録しました。東京都では昭和60年より独自に4~6人を養育するファミリーホーム制度がありましたが、平成21年、国は小規模児童養育事業として制度化し、旧制度、新制度双方で14年間ファミリーホーム養育をさせていただきました。現在はNPO法人養育家庭の会みどり支部の支部長を務めさせていただいています。

里親は私にとっては生き方です。その生き方を支えてくれたのは子どもであり、夫であり、仲間です。この受賞は私だけのものではないと思っています。

人生が続く限り私は子どもと歩むこの生き方を貫いて行きたいと思っております。ありがとうございました。



■ 宮が瀬ダムバーベキュー



■ 年一度の里親家族全体交流会



■ 平成21年9月26日宮が瀬ダムバーベキュー会場



■ 全体交流会のミニ運動会で支部長として挨拶



■ 八王子、町田、日野市の全体交流会のミニ運動会



やま さき いっ せい
山崎 一誠
(74歳/鳥根県出雲市)

荒れ放題になっている山林を見かねて、平成元年頃から植林と整備に取り組み、鳥根県三瓶山の西10キロ地点で合わせて10haの山を購入し、1万3千本の杉や檜を植林し枝打ち、草刈りなどの重労働をしながら山の環境保全を20年にわたり続けられている。

●推薦者/神田 一美

縞斑松の横で

昭和の末ごろから松枯れが進行し、木材価格の低迷で山林地主は意欲を失い、後継者は都会に出て廃屋が多くなっている。代替りして境界もわからなくなっているのが現状である。

自然のままに竹山、つた山になり林道がくずれたり木が倒れたり荒れ放題になっている現状を見るにつけ強く整備と植林を決意した。

平成元年頃、鳥根県三瓶山の西10kmに舗装市道から700m林道を入った10haの山地を求め、まず手始めに4haの山に植林をはじめた。

一口に植林といっても、まず30年ぐらいの雑木を切り倒しそれを移動、整理して植える場所をつくり2m間隔に竹でしるしをつける。傾斜があり雑木も大きいので大変な重労働作業でした。

次の年に森林組合の助言を得て杉3,000本、檜7,000本を植林した。1万本の植林ですので家族や知人、友人の協力を得て、土日を中心に植林をした。1本90円の苗代と共に傾斜の中スコップでの植林は重労働の作業でした。

1万本の植林も大変でしたが、植えた後一斉に笹や草、つたや切り株からの芽が伸びはじめ1~2mになり植えた苗を枯らす。4haを年2回の下刈りが5年ぐらいは必要であるし、約千本の枯れた苗の補植もあり、土日を中心として夫婦中心の作業で、はじめは大鎌の作業でしたので体力的にも大変な苦勞でした。

現在20年たち、手の届くところの下枝を切り、惜しいけれども強い木にするため3,000本の間伐が必要である。現在500本ぐらい切ったところである。安全のために手鋸で作業をしている。そして残りの7,000本は3mのむかで梯子に登って1本30枝ぐらいを小さい手鋸で切る作業なので、体力もいるし危険が伴うが今50本ぐらい終わったところである。まだまだである。(写真①②)

ところで退職して時間が取れるようになり、4年前に今までの奥2haの植林をした。ここもま

Issei Yamasaki (Age 74/ Izumo, Shimane Prefecture)

Unable to look on with indifference at the deteriorating state of the mountain forests, Mr. Yamasaki began to take initiatives in tree planting and forest maintenance around 1989. After retiring as principal of an elementary school, he purchased a total of 10 hectares of land in the mountains 10 kilometers west of Mount Sanbe in Shimane Prefecture where he has continued his efforts at the environmental protection of the mountain for more than 20 years. During this time he devoted his efforts to the intense work of planting and pruning close to 10,000 cedar and hinoki cypress trees and cutting grass.

Recommended by Mr. Kazumi Kanda

ず雑木を切り倒し整理した。ここでは自生の松、山桜を50本以上切らずに残した。そして、今度は広くして3m間隔で2,000本の松、杉、檜を植林した。現在、年2回の下刈りをして、2mぐらいに生長している。これまでに枯れた苗の補植を400本ぐらいにしている。苗代1本120円とともに刈り払機による下刈りなど加齢と共に大変な作業になっている。(写真③④)

今年は新しく1haの雑木を切り1,000本の植林予定でしたが、猛暑で作業が遅れ現在6割方すすんでいる。今年中には終了させたい。

今後残りの馬蹄形の奥の頂上までの残り3haを3年かけて雑木を伐採し、3,000本を植林し一応のけじめをつけて10ha全体の一週コースなどをつくり山全体の整備に取り組みたい。(写真⑤)

最近ではエコ活動が叫ばれる中、植林作業が洪水を防止し、大地をささえ、水源を涵養しおいしい水、栄養ある海をつくり、地球温暖化のCo2を吸収し、動植物の棲みかとなり、また、国内産林木の育成をはかり、森林セラピーの場として活用できるために、わずかでも貢献できるなら望外の喜びである。



①20年前に植林した檜の5m枝打ち

②最初に植林した入口の杉

③右1万本の植林地スペース左2千本新植林地

④新植林地の下枝切り

⑤頂上までのこれからの植林予定地



うえはら こうじ
植原 康治
(82歳／群馬県前橋市)

昭和62年に勤めていた会社を定年退職後、朝の散歩で通りかかったJR新前橋駅前の駐輪場に乱雑に置かれた自転車が目に留まり「誰かがやらなければ」と整理を始めてから22年間、ボランティアで早朝から1時間半かけて600台以上の自転車を整理されている。

●推薦者／竹之内 文男

「駅で自転車整備22年」

昭和62年、定年退職を機に健康管理のため、朝のウォーキングを始め、最初は自宅周辺を歩いていたが、コースを変えて自宅から3km余（時間にして40分）の新前橋駅前まで行くと、駅前広場や路上に多数の自転車が散乱しているのに驚きました。

当時は駐輪場もなく、全くひどいもので、このままでは歩行者の邪魔になると、自転車の整理を始めました。

その後、市が有料駐輪場を駅前に設置し、駅前や路上は全面駐輪禁止となりました。駅前から100m位離れた路線沿いに無料駐輪場があり、今度はそちらへ置くよう移動しましたが、そちらも相変わらず乱雑に置く人が多く、特に駅に近いほどひどい状態でした。

車道にも置いていくと、車の運転手が通行に邪魔な自転車を、整理した自転車の上に放り投げて行くので、これを取り出すのも時間がかかり、大変な作業になります。

誰に頼まれたわけでもなく、自分1人でやっていて、いつの間にか22年になりました。自転車整理の他に、路上に散乱している空き缶・ペットボトルなどの片づけ、ゴミの処理などもやっております。私の座右の銘は「不言実行」です。



■新前橋駅周辺の自転車整理

Koji Uehara (Age 82/ Maebashi, Gunma Prefecture)

After retiring from the company where he worked in 1987, Mr. Uehara during his morning walk noticed the disorderly clutter of bicycles in the bicycle parking area at the front of the JR Maebashi Station. He casually began putting the bicycles in order, thinking “Somebody has to do it.” Since then, for the past 22 years, he has been voluntarily spending one and a half hours early every morning putting in order more than 600 bicycles.

Recommended by Mr. Fumio Takenouchi



■整理前は白線も飛び出す

■整理された自転車は青い線の内側に



■黙々と整理する植原さん





代表 吉村 友佑

でいお たすけ
Dioクラブ太助
 (千葉県柏市)

代表者が在職中に社会福祉の通信講座を受けて在宅介護の必要性を感じ、高齢者や障害者のバリアフリー工事などの負担の大きいことを知り、日曜大工の技術を活かし材料費と交通費のみで家の悩みを引き受けるボランティア活動を平成12年から始めた。はじめは一人だったが、同市にクラブを設立しボランティア仲間や口コミで一級建築士や大工経験豊富なメンバーが集まり、柏市や流山市で活動されている。現在クラブ員約12名、700件の家の修理や補修を実施した。

●推薦者／柏市社会福祉協議会

停年になる数年前から、退職して年金生活をするようになったら「濡れ落ち葉」と言われないうようにしたい、できることなら、私が日常自宅で「日曜大工」をしているそのままをボランティアに活かしたいものだと考えるようになっていた。自分の趣味を活かす活動が最も自然であり無理が無いとも思った。しかし、それまでの人生ではボランティアの経験は殆どなく社会福祉の実情についての知識も乏しいので、前もって基礎的な勉強をしておこうと、退職前の2年間に「社会福祉」の通信教育を受講した。そして退職後早々にある団体の会合で「日曜大工のボランティア」の提案をして同志を募ったところ、手ごたえのある反応があり、それから数回の検討会を経てボランティアグループ「Dioクラブ太助」の誕生となった。

「Dio」は「do it ourselves」で、DIY(do it yourself)をもじったもの、「太助」は「一心太助」の心意気である。

スタート直後の数週間は、PRに明け暮れていた。高齢者や障害者などの福祉に関係ある組織や機関を手当たり次第に訪問し、チラシの配布などの協力を要請して歩いた。当初は「開店休業」の不安が付きまとっていたが、2年目を迎える頃には、それは全くの杞憂となっていた。後で分かったことであるが、自分達が気付かないところで、多くの人達が口コミの宣伝をしてくれていた。こうして、順調に活動が展開されるようになって暫くすると、メンバーの中から「このボランティアを始めてよかったよ」とか「こんなに感謝されるなんて」などの感想が漏

Dio Club Tasuke (Kashiwa, Chiba Prefecture)

After taking a correspondence course in social welfare while working, the representative of this organization felt that there was a need for home nursing care. Realizing the significant burden on the aged and people with disabilities in bearing the cost of barrier-free construction work in their homes, the representative in 2000 decided to take on this burden for just the cost of transportation and the cost of materials by putting his do-it-yourself carpenter skills to work. Initially, he was the only volunteer but after establishing the Dio Club Tasuke in Kashiwa City, he was joined first by fellow volunteers and, thanks to word of mouth communication, some first-class registered architects and persons experienced in carpentry work. With a membership of about 12 people, Dio Club Tasuke is active in both Kashiwa and Nagareyama cities in Chiba and has been involved in the repair and maintenance of 700 homes.

Recommended by the Kashiwa City Social Welfare Council

らされるようになった。訪問先での仕事が終わって引き上げる時、依頼主から「どうも有難うございました」「大変助かりました」などの厚い感謝の言葉を頂いて感激しているのである。大変手間のかかる工事などで疲れはてたり、難しい工事で苦労を重ねたりして、普通ならばグチの一つも出そうな時でも、こうした感謝の言葉を聴くと達成感や満足感で心が癒されてしまう。私達は「ボランティア冥利」につきると感じあっているのである。

このようにして、10年途切れることなく活動を続けているが、その間に新しい技術の研究と習得にも努力しており、新しい工具や部材も積極的に取り入れている。現在では、高齢者や障害者などの支援だけでなく、NPO法人が運営する「デイサービス」「グループホーム」そして「小規模作業所」などからも依頼をうけており、さらに「児童センター」「図書館」といった公的施設にも活動を展開するに至っている。今後も健康に留意して、足腰の動く限りは活動を続けたいものと考えているが、メンバーの高齢化は避けがたく、次世代への引き継ぎが大きな課題となっている。団塊の世代の人達には是非こうした活動に参加して欲しいと願っている。



作業風景





たけうち けいいち
竹内 敬一
(56歳／山梨県北杜市)

昭和58年に八ヶ岳で山小屋経営を始めたころから山岳救助活動に携わり、平成2年に山梨県の長坂警察署山岳救助隊に参加。27年の長期にわたり、八ヶ岳や甲斐駒ヶ岳を中心とした遭難現場に出動し、困難かつ危険な救助活動を克服し多数の遭難者を救助している。また、平成12年に救助隊隊長に就任し、現在に至るまで、山岳救助活動や登山者の遭難事故防止活動の中心となって活動されている。

●推薦者／財団法人 警察協会 会長 今泉 正隆

私が山岳救助に関わり始めたのは、山小屋の経営という地理的条件からでした。遭難の現場に近いということで散発的ではありましたが警察の救助活動に協力してきました。そのうちに救助隊も人材が乏しいとのことで、当時山岳救助隊の中心になって活動されていた先輩から正式に参加して欲しいと要請されました。

私は以前から山小屋経営の他に、山岳ガイドも仕事としていた為、登山技術や救助技術を買われたのかもしれませんが。

山岳救助隊は警察官と地元の方々の山岳会などで構成されていますが、救助訓練などの際には、いつの間にか自分が講師になっていました。そこで救助隊全員が同じ技術を持てるように、ガイド用のレスキュー技術を救助隊用にアレンジしてオリジナルのレスキューマニュアルを作成したりもしました。しかしその当時遭難救助の全てに関わっていたかと言えば「否」でした。

土曜日や日曜日は山小屋や山岳ガイドの仕事で忙しく、遭難が発生しても、その全てに駆け付けることは困難だったからです。救助隊の先輩に叱られたのはそんな事が何度かあった折でした。「救助には人命が係わっているんだよ。もうちょっと真面目にやってくんねえかい！」出動の要請を断る度に、後ろめたい気持ちでいた自分には痛い言葉でした。しかしその先輩の一言で、全て吹っ切ることができました。考えてみれば、自分は千葉県の大塚市に生まれ、学生の頃からは雑然とした都会に住んでいましたが、山好きが高じてどうしても山の中に住みたいとなり、その山として八ヶ岳を選び、30年前にやってきました。ところが風来坊のような私

Keiichi Takeuchi (Age 56/ Hokuto, Yamanashi Prefecture)

Mr. Takeuchi has been involved in mountain rescue activities since he started managing a mountain lodge in Mount Yatsugatake in 1983. In 1990 he joined the mountain rescue unit of the Nagasaka Police Station in Yamanashi Prefecture. Since then he has spent 27 years actively assisting at accident sites in the mountains, particularly at Mount Yatsugatake and Kai Komagatake Mountain, and he has rescued many victims in difficult and dangerous rescue activities. In 2000 Mr. Takeuchi took up the position of chief of the mountain rescue unit and has been playing an active role as the leader in mountain rescue activities and the prevention of accidents in the mountains.

Recommended by Mr. Masataka Imaizumi, Chairman, Japan Police Support Association

に山小屋を継がせてくれたり、救助隊に誘ってもらったりと、地元の方々に大変お世話になりました。なるべく人間と関わりたくないと思って入った山で、逆に沢山のひとと知り合い、生かしかされている自分を感じていたので。

それからは要請があれば、どんな時にでも救助に行くことに決めました。

数年後、私は隊長に任命されました。山岳救助隊などというと格好良く見えるかも知れませんが、実際危険な場所で瞬時に最善の救助方法を考え、判断を下すことは責任の重さを痛感するがゆえに、相当な孤独感と恐怖心を伴います。最初の頃はその重圧に苦しみましたが、救助隊の仲間達、警察官の方々、ヘリコプターを運用している航空隊の方々との友情や信頼関係を感じている今は、それも少し緩和されました。

山梨県北杜警察署救助隊の管轄は、八ヶ岳の南部、南アルプスの北部、奥秩父の西部と広大です。少しでも遭難を防ごうと、登山道の鎖場整備等、警察官も交え一緒になって取り組んでいます。

これからも三者の連携を深め、いざ遭難となれば迅速に救助できるよう、日々精進してまいります。

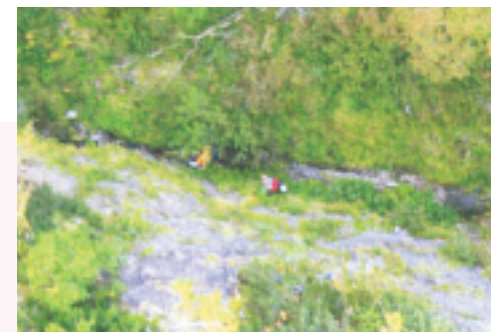


チョモランマ(エベレスト)に登頂した時の勇姿



救助活動の様子

山小屋と救助者の位置関係



谷間の捜索活動



救出作業風景



やまぐち てつじ
山口 哲二
(82歳/佐賀県伊万里市)

児童生徒の交通事故防止に非常に熱心に取り組み、昭和47年に伊万里市の交通安全指導員に就任し、交通安全指導とともに指導員の育成にも力を入れ、伊万里市交通安全指導委員会の基礎作りを行なうとともに38年にわたり一日も欠かさず早朝から街頭指導を行い、児童生徒一人ひとりに声をかけ交通事故防止に努められている。

●推薦者/伊万里市役所

私の故郷は焼き物で有名な佐賀県伊万里市です。

富士山を思わせる勇壮な山構えから、市民に『伊万里富士』と呼ばれ親しまれている『腰岳』という山の麓に居を構え、永年農業に勤しんでまいりました。

農業をする傍ら、交通安全指導員として毎朝立哨指導を行ってまいりました。これまでの間、指導中の事故は1件もありません。このことは、心から嬉しく思いますし、指導員をやってきたよかったと、もっとも感じるところです。

あと、指導員をやってきたの何よりの宝物は、こどもたちとの触れ合いです。毎朝こどもたちからいただく笑顔、あいさつや交わす会話に喜びとパワーをもらっております。

振り返ってみますと38年以上毎朝立ち続けているわけですが、長いと感じたり、つらいと感じたことはまったくありません。

私のなかでは、毎朝交通安全指導をして、こどもたちと会うことは、生活や人生の一部であり、ごく自然なことなのです。

また、地元の小学校の5年生を対象に『田植えの学校』という農業体験授業の世話役をやっておりますが、これも27年続けております。元来、こどもたちが好きで、何においても続けるということが得意な性分なのかもしれません。

現在、年齢は82歳になっておりますが、交通安全指導員は体の続く限り、死ぬまでやるつもりです。

最後になりますが、事故のない安全な社会の実現を心から祈念し、また、事故で亡くなられた方のご冥福をお祈りします。

Tetsuji Yamaguchi (Age 82/ Imari, Saga Prefecture)

Mr. Yamaguchi is thoroughly committed to the prevention of traffic accidents involving school children. Appointed as a traffic safety supervising instructor in Imari City in 1972, over the years he has devoted his efforts to supervising traffic safety and training traffic safety supervising instructors. He has also been instrumental in laying the foundation of the Imari City Traffic Safety Supervising Committee. Early every morning for more than 38 years, without missing a single day, Mr. Yamaguchi has been supervising traffic safety at the curbside and addresses each and every school child in efforts to make them aware of traffic safety.

Recommended by the Imari City Office

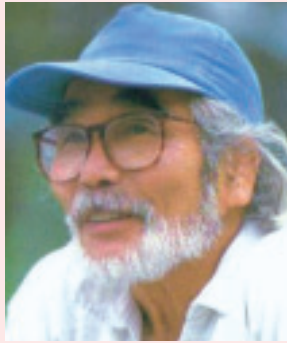


■ 付近の小学校



■ 交通安全指導して交通事故防止に努める





代表 桑原 寛樹

くるみクラブ

(東京都三鷹市)

昭和40年に中央大学の体育授業でラグビーを経験した学生たちによって結成されたクラブで、社会人、大学生を中心にスポーツを通じた仲間づくりと青少年の育成に45年に渡り取り組んでいる。また、クラブの有志が共同生活する「寮」を三鷹市で運営しており、社会生活の基礎となる人間関係をスポーツを通じて育むとともに近年は不登校や引きこもりなどの経験を持つ若者も受け入れるなど通算で1万名のクラブ員、1千名以上の寮生活経験者を送り出されている。

●推薦者/NPO法人 日本ソーシャルマイノリティ協会

くるみクラブは1965年、中央大学の体育講師であった桑原寛樹（現クラブ会長）の体育授業で、ラグビーを経験した学生達によって作られたクラブです。以来45年間、社会人、大学生を中心に、スポーツを通じた仲間づくりと青少年の育成に取り組んできました。

くるみクラブの大きな特色として、1971年に取り組んだ「くるみ蔵王グランド」の建設があります。桑原と大学生を中心とした約300名のくるみクラブのメンバーは、ラグビーで培ったチームワークを活かし、宮城県の蔵王町において手造りのグランド建設に挑戦しました。資金はなく、学生はアルバイトで貯蓄し若いOBはボーナスをそっくりそのまま返上し、さらには早朝から夜まで雑木林を切り開き、カンナやノコギリの手慣れぬ仕事に汗は青春の思い出と一心不乱に取り組みました。こうして完成させた「くるみ蔵王グランド」において、今もクラブでの活動を通じ多くの若者が育まれています。ラグビーだけにとどまらず、テラスを備えた喫茶室やクラブメンバーが全て取り仕切る厨房施設など、メンバーを楽しませるために必要な多くの作業、仲間たちの語らいなど、若者を育む上で不可欠で魅力的な環境に溢れています。

もう一つクラブの特徴に「寮生活」があります。それは桑原の教育観の中核をなすものであり、すなわち若者たちの自由と自治の訓練の場です。週1~2回のラグビー、早朝のトレーニングや持ち回りの食事当番、食卓を囲んでの語らいなど、決して上からの押し付けではなく、様々な共同作業を通じて自分の責任をきちんと果たすことや他人とのチームワークを学び、人と人

Kurumi Club (Mitaka, Tokyo)

The Kurumi (Walnut) Club was formed in 1965 by students who had played rugby during their physical education classes at Chuo University. The club members, including both working people and students, have been promoting initiatives for the development of friendship and training of young people through sports for 45 years. The club also operates a dormitory where volunteers of the club live communally. In addition to promoting sports as a way of developing human relationships, which form the foundation of social life, in recent years the club has been accepting young people who had in the past refused to go to school or became recluses at home, isolating themselves from society. The club has been instrumental in assisting a total of 10,000 club members, including over 1,000 who experienced communal living in the club's dormitory, adjust to their roles in society.

Recommended by the NPO Japan Social Minority Association

とのつながりや友情を育むことを目的として運営しています。

また女子学生の活動の場として、女子ホッケーチームの運営、さらに蔵王グランドでは、クラブの大学生を中心に運営補助にあたる、高校、中学校のラグビー合宿や盛岡の知的障害者施設「緑生園」のラグビー合宿が恒例行事となるなど、少しずつクラブの内外に活動の場を広げてきました。

クラブ寮においても、他競技に取り組む選手や大学受験生、学生相談室に訪れる若者や、不登校、引きこもり経験をもつ若者など、互いの仲間作りの一環として、垣根を設けず積極的に受け入れています。

クラブ寮については現在東京都三鷹市において運営しています。互いのコミュニケーションが希薄になりがちな現代社会状況の中、スポーツ分野だけでなく、教育分野や保護者の方々からも関心をもって頂くことが多くなってきたように思います。仕事や学業の合間を縫った限られた時間の中ですが、くるみクラブの活動が分野を問わずより多くの仲間作りの場となるよう、メンバー一同、今後も試行錯誤を続けていきたいと考えています。



現在の蔵王グランド



蔵王グランドで子どものイベント



寮の風景



井の頭寮と寮生



蔵王グランド建設の頃



代表 藤井 喜彦

はこだて かい 函館ひまわりの会

(北海道北斗市)

学校外においても障がいのある子どもたちが活動できる場として、昭和61年函館市で会を設立され今年で25周年を迎える。特別支援学級の生徒もマラソン大会で完走できる様に、そしてたくましい体力と気力を育もうと、先生や父母の協力のもとパラリンピック選手を輩出するまでに至った。夏の日曜は五稜郭公園での早朝ランニング、スキー教室をしたり、ヨットのセーリングなど障がいのある児童や大人に至るまで、学校外においても様々な体験ができる場となっている。

●推薦者/天野 真樹

「社会貢献賞受賞にあたって」

ひまわりの会が発足して今年で25年目を迎えた。私が凌雲中学校へ赴任した当時、大沼一周の全校マラソンが行われていた。子ども達に何とか大沼を1周させたい・・・そして大沼1周14km完走を目指して、子どもたちの練習が始まった。体育の時間を使って陸上競技場や五稜郭公園で練習が続いた。しかし学校教育の枠の中だけでは、限界があった。ひまわりの会は、父母と共にこうして誕生した。

幸い助っ人として高垣先生(現事務局長)が赴任し、ひまわりの会の活動が大きく広がった。たくましい体力と気力を育もうと取り組んできた持久走も、みんなの中にしっかりと根を下ろし、大きな輪に成長してきた。

私たちの会では、障がいのある子どもたちの発達を支援するために、少しでも多くの活動する機会を作ってあげようと、持久走を中心に年間を通して活動を続けてきた。

会の日常的な活動として行われている五稜郭公園での早朝ランニングをベースに、洞爺湖マラソンや千歳JAL国際マラソン、大沼グレートラン、函館ハーフマラソンへの参加など、会の中だけでの活動にとどまらず、障がいのある人も、ない人も、みんな同じスタートラインに立って活動できるすばらしさ・・・を大切に、これからも頑張っていきたいと思っている。これからも持久走を積極的に取り入れ、長い距離を走り抜くたくましい力を育てると共に、地域のマラソ

Hakodate Himawari no Kai (Hokuto, Hokkaido)

Celebrating its 25th anniversary this year, the Hakodate Himawari no Kai (Sunflower Group) was established in Hakodate City in 1986 as a venue where children with disabilities could engage in various activities outside of school. The group was formed with the cooperation of teachers and parents to enable students in special needs classes to complete full distance marathons and to develop robust spirits and mental toughness. The group has even succeeded in turning out some athletes for the Paralympics and conducts running training at Goryokaku Park on Sundays in the summer. It also offers skiing lessons, sailing classes, and venues where not only children but also adults with disabilities can experience a wide range of activities outside of school.

Recommended by Mr. Masaki Amano

ン大会などにも積極的に参加し、たくさんの人たちとふれ合いながら、交流の輪を広げていきたいと考えている。

「走った距離は裏切らない」ことばを変えるときに「継続は力なり」である。何よりも嬉しいことは、学校を卒業して社会に出た仲間の多くが25年経った今も参加していることだ。

ひまわりの活動は、マラソンだけではなく、多方面に渡る。ヨットや、カヌー、冬のスキーへの挑戦も25年間続いている。ひまわりの活動に参加して来たお友達の中には、学校を卒業して仕事の面など生活の環境が変わり、なかなか参加できなくなった人たちもいるが、年に一度の新年交歓会には、必ず、懐かしい顔を見せてくれる。本当に嬉しいことだ。一人では、何もできない、でもひまわりの仲間の大きなきずな、思いやる暖かい心にふれ、共に活動する中で、つらいことも我慢でき、そこに感動が生まれてくる。そしてたくさんの機会にめぐり合い、そこに素晴らしい出会いが待っている。

ひまわりはひとつの大きなファミリー、父母や支援してくれるたくさんのボランティアの心温まるサポート、そして、協力があって続けて来れた事、今まで支えてくれた、たくさんの人たちに感謝して、自分の生活を少しでも充実できるように、ゆっくりでもいいから大地をしつかりとふみしめて歩んでいきたいと願っている。



■ カヤック交流体験教室



■ スキー交流



■ セーリング体験交流

■ 早朝ランニング





きむら よしじ
木村 義次

(92歳／徳島県徳島市)

「烏雲」という徳島県出身で戦時中モンゴル人の養父母に匿(かくま)われて育ち、同国の教師となり後にモンゴルの砂漠の緑化に尽力した人物に感銘を受け、同志を募り中国内蒙古ホルシン沙漠緑化大作戦を平成8年から開始し、延べ18回、700名、300万本の植樹をした。また、植林の他に平成11年から中、高生対象に奨学金を8名に贈り続けるとともに、小学校3校、中学校寄宿舎1校を建設されている。

●推薦者／上野 隆

NPO法人
烏雲の森沙漠植林
ボランティア協会
理事長

「報恩の沙漠植林に共鳴して」

命を賭して敵国の少女を庇護してくれた中国人への恩返しに、沙漠に植林をしていると、涙いっばいに話しかける、中国残留日本人孤児「烏雲」ウユン（日本名、立花珠美さん）の講演を聴いて、自らも落涙やまず、痛く共鳴。

「ヨーシ、やったる」。30年間ライオンズクラブの社会奉仕で培ってきた体験の集大成はこれだ、と感激して以来、「やればやれる、やらなんだらできん、みんなでやろう。」を合い言葉として、テレビ、ラジオ、新聞や講演によって、個人や各種団体に訴え続けた。

「中国内蒙古ホルシン沙漠で、拓がる沙漠に植林して、昔の緑の大地を再生しよう。」

報恩と云う人間最高の愛を捧げている「植林隊」の理念は、多くの人々の心を揺さぶった。私達の運動に実践参加者は、1996年より11年間に、延べ637名の同志が渡蒙、1000haに300余万本を植樹。植林の必要性を痛感した中国一般民衆から、多数の共鳴実践者が輩出したことと、沙漠の中の学校が、森の中の学校へと変貌したことである。また隊員の中には、教員ご経験者も多く、学校施設の充実や、奨学金を10年間継続実施した結果、現在受給者の多くが、中国社会で、高度な活躍をしているニュースも私達への嬉しいプレゼントである。

このような状況を見ることが出来るのも、多くの日本人先覚者の不撓不屈のたゆまぬご努力

Yoshiji Kimura (Age 92/ Tokushima, Tokushima Prefecture)

The story of a man named Cho Un left a lasting impression on Mr. Kimura. Cho Un, who was originally from Tokushima Prefecture, was brought up by Mongolian foster parents during wartime and went on to become a teacher in Mongolia and to devote great efforts to the greening of the desert in Mongolia. Following in the footsteps of Cho Un, Mr. Kimura gathered a group of like-minded people and began the Great Operation for Greening the Horuchin Desert in the Inner Mongolia Autonomous Region in China in 1996. In total, his group conducted the total of 18 tree-planting operations involving 800 people and planted 3,000,000 trees. In addition to tree planting, since 1999 the group has been providing scholarships for junior high school and high school students in Mongolia and has already awarded scholarships to eight students. It has also constructed school buildings for the three elementary schools and one middle school.

Recommended by Mr. Takashi Ueno

の賜であり、私達植林隊の活動に、陰に陽になってご指導いただいた、岩手県の菊地豊氏と今は鬼籍におられる、友の細川昭典、第3代理事長のご功績を看過することはできません。

そして、この誌面に書き列べたい多くの同志が、日本各地に点在しておられることです。

最後に、私達が設立したNPO法人烏雲の森沙漠植林ボランティア協会の後継者が、今後も渡蒙し、地球環境保全のため、継続植林の奉仕に精出していただいていることにも、感謝と敬意を表します。



■ 庫倫第一中学の教育林



■ The Green Belt起点碑除幕式



■ 庫倫旗一中での生徒たちへ沙漠植林講義



■ 第一次植林隊1996年5月26日



■ 中国式開溝造林方式の植林



■ 赤い夕日 沙漠は拓がる



理事長 梅本 俊夫

うめもと きねん し か ほうし だん 梅本記念歯科奉仕団

(大阪府大阪狭山市)

昭和25年に大阪歯科大学梅本芳夫教授（故人）が学生にハンセン病を病む人々に生きる希望と喜びを取り戻すために歯科治療の奉仕活動と呼びかけたのが始まりで、外界から隔離された患者や回復者の歯科診療をした。60年代後半からは日本国内だけでなく台湾、韓国の療養所でも診療をはじめた。特に韓国での活動は高く評価され、その後タイやベトナム、ラオスなどアジア各国でも奉仕団による診療や治療そして人材育成など60年にわたる奉仕活動が続けられている。

●推薦者／紀伊國 献三



「梅本記念歯科奉仕団の歩み」

この度、表彰して頂くことになりました梅本記念歯科奉仕団は、ハンセン病に対する偏見と差別を無くす為の啓蒙活動と、歯科医療を通じてハンセン病患者とその家族の方がたに対する支援活動を行っているNGOであり、現在タイ、ベトナム、ラオスの3カ国で活動を行なっています。

この組織は今から60年前の昭和25年（1950年）に、当時大阪歯科大学の教授であった故梅本芳夫博士が、戦後の荒んだ世情の中で将来医療に携わることになる学生達の倫理感を育成したいとの思いから呼びかけ、この活動に共感した学生たちによって、大阪歯科大学救らい奉仕団として設立されました。

当初の10年間は、啓蒙活動を兼ねた街頭募金および音楽や演劇による募金公演を行うと共に、瀬戸内海にある3箇所のハンセン病療養所を中心にした慰問活動が行なわれました。募金公演は昭和55年まで30年間にわたって都合45回、当時の一流のアーティストの方々のご協力を得て行われました。

なかでも昭和47年から51年にかけて、NHKホールで行われた小沢征爾指揮、新日本フィルハーモニー交響楽団の演奏による交響曲第九の公演は、毎回今上天皇陛下と皇后陛下（当時は皇太子殿下と妃殿下）のご臨席の下に開催されました。

Umemoto Memorial Dental Volunteer Group (Osaka Sayama, Osaka)

This group began with the call from Professor Yoshio Umemoto from Osaka Dental University for volunteers to provide dental treatment for people suffering from Hansen's disease and in so doing restore their hopes and joy of living. The group began by providing dental treatment to patients who were isolated from the outside world and to those who were recovering from the disease. From the latter half of the 1960s, the group expanded its operations by providing dental treatment not only in Japan but also in clinics in Taiwan and Korea. The efforts of the group in Korea especially were highly appreciated. The group continued to expand its volunteer dental consultation and treatment and the training of human resources to other Asian countries including Thailand, Vietnam, and Laos and has been treating patients for 60 years.

Recommended by Dr. Kenzo Kiikuni

療養所への歯科診療活動は、昭和35年に当時まだ米軍の占領下にあった沖縄の療養所を訪問するに当たって慰問よりも是非歯科診療をして欲しいとの患者さんからの強い要望を受けて、拔牙や充填に加えて義歯の作製まで行う歯科診療を行うようになり、その後国内の療養所への歯科診療活動は、歯科医官の配属がほぼ充足される昭和52年まで17年間続けられました。

またその間、台湾の3箇所の療養所に昭和39年、40年、42年および46年に診療団を派遣しました。さらに、韓国的小鹿島病院にも昭和43年から診療団を派遣するようになり、そのことが契機となってソウル大学の歯学部にも韓国救ライ奉仕団が結成され、その後私達と協同して韓国の療養所における歯科診療を行うようになりました。

韓国での活動を韓国救ライ奉仕団が行うようになったのを受けて、私共は東南アジアに活動の場を移すことになり、昭和52年から10年間フィリピンのセントラルルソンサナトリウムに診療団を派遣しましたが、当時のマルコス大統領が失脚するという政変が起こったため、中断の止む無きにいたりしました。

昭和56年3月に活動の中心的存在であった梅本芳夫博士が大学を退職後、まもなく病に倒れたことから、OBのみで新たに梅本記念救ライ奉仕団が結成され、私が理事長を引き受けることになり現在に至っています。組織の名称についてはライという言葉が差別につながるとの社会的認識にあわせて現在の名称に変更しました。

私が理事長になって以降、1987年からタイ、また1996年からベトナム、さらに2001年からラオスで活動を開始し、現在に至るまでそれぞれの国に年2～3回診療団を派遣して複数の療養所あるいは定着村に対する巡回診療を今日まで続けています。

東南アジアのこれらの国においてもハンセン病患者の人たちが一般社会で生活していくことは困難であり、患者とその家族たちが集まってコロニーを作って暮らしているのが現状です。

また、これらの国は経済的に発展途上にあり、ハンセン病患者に対する医療も社会保障も極めて不十分であるといわざるを得ません。このような状況下では、まだまだ私達の活動は必要とされており、私達も団設立時の先人達の情熱と志を忘れることなくこの活動を続けていかなければならないと考えています。



■ 現地活動風景



■ 歯磨き講習



■ 現地で義歯製作





理事長 石渡 博明

しゃかいふくしほうじん こくさい しかくしょうがいしゃ えん ごきょうかい
社会福祉法人 国際視覚障害者援護協会
 (東京都板橋区)

昭和46年に日本に留学中の視覚障害者4名によって母体のクラブが設立され、発展途上国の視覚障害者が日本で学び、自国の視覚障害者福祉を発展させられるリーダーを育成できるように奨学金制度を創設。平成7年に社会福祉法人として認可され、アジア、アフリカなど17ヶ国の視覚障害者を留学生として日本に招いて勉学する機会を提供し、経済的自立を可能にする職業としての理療やIT技術を修得してもらうことを目的に活動されている。40年で72名に支援をされている。

●推薦者/NPO法人 六星

アジアをはじめとする発展途上国の視覚障害者の置かれた立場は、かつての日本のようにきわめて厳しい状況にある。周囲の偏見の中で教育の機会すら与えられない場合があり、盲学校に入りたくても盲学校の数が少なく、普通学校に入れても点字の教科書がなかったり、「眼が見えないあなたが、いくら勉強しても時間もお金も無駄。」と突き放されることもあるという。

それに比べて日本は、障害者福祉も人々の意識もまだまだ不十分な面があるとは言え、アジアの中ではダントツの水準にあり、特に3療（鍼・灸・あんま）は、視覚障害者の就労、自立にとって大きな強みとなっている。

そうした中、幸いにも日本に留学できたアジアの視覚障害者4人は、日本留学という貴重な経験を自分たちだけで終わらせたのではもったいない、母国の視覚障害者、アジアの視覚障害者に広くチャンスを提供したいと考えて、奨学金制度を設けた。日本で3療を学んで母国へ帰り、職業的に自立してほしい、日本の社会福祉を体験して同じ視覚障害者の仲間のリーダーになってほしいという願いからで、1982年のことである。会は前史も含めて来年で創立40年を迎えるが、これまでに17ヶ国から72名を受け入れてきた。

また、留学生を受け入れるだけでなく、海外で日本式マッサージの普及講座を開いたり、海外の視覚障害者事情の調査を行ったりもしてきた。文部科学省の補助を得て、盲学校入学前の予備教育（日本語・日本点字・生活訓練等）を行えるようになってきた。そして最近では

Social Welfare Corporation; International Association For The Visually Impaired (Itabashi-ku, Tokyo)

The parent organization of this association was founded by four visually impaired persons who were studying in Japan in 1971. The association established a scholarship program to enable visually impaired students from developing countries to study in Japan and to train leaders who will develop welfare systems for visually impaired persons in their own countries. In 1995 the association was accredited as a social welfare corporation. It is currently promoting activities to provide opportunities for international students with visual impairments from 17 countries in Asia and Africa to study in Japan and to enable them to acquire skills in therapy and IT technology as professions that will enable them to become economically independent in the future. Over a period of 40 years, the association has provided 70 scholarships.

Recommended by the NPO Rokusei (Six Stars)

他のNPO組織などとタイアップして、徐々にだが帰国留学生を中心にいくつかの国で、視覚障害者の教育、就労についてのネットワークや支援システムができつつある。

とは言え、順調なことばかりではなかった。中には体調のせいで、あるいは成績が思うように伸びず、志半ばで帰国を余儀なくされた人もいる。また、さまざまな事情で日本に留まっている人たちもいる。ただ、滞日中の人たちも、当初の思いとは形を変えながらも日本と母国の橋渡し役を担ったり、母国の視覚障害者の支援をしたりと、さまざまに社会に貢献している。

現在の最大の悩みは財源的な制約から、留学を希望する人たちに十分に支えられていない、希望があっても人数枠の関係でお断りせざるを得ない状況にあることだ。財政的な強化を図り、一人でも多くアジアの視覚障害者の日本留学を実現し、職業的な自立、社会的な自立をバックアップしていきたい。



会員の皆さんと留学生の交流会



板橋区ふれあい祭りにて



協会主催の講演会



帰国留学生の活躍
ミャンマーマッサージ訓練センターにて



理事長 メリー・ペナー



ほうじん きぼう くるま NPO法人 希望の車いす

(東京都練馬区)

日本国内の老人介護施設やリース会社や個人から不要になった車いすの寄贈を受け、ボランティアの手で完全に修理、整備して磨きあげ、アジアに贈る活動を10年続けている。現地までの輸送は出張者や旅行者のボランティアを募り飛行機で運ぶか、企業の支援協力を得てコンテナで運んでいる。これまで12ヶ国に合計550台以上の車いすを寄贈した。

●推薦者/水戸聖書バプティスト教会 川崎 満

車いすがあれば動くことができる、希望が持てる、人生が変わる。私たちはこんな車いすの可能性を信じている人々が、手を取り合っているネットワークです。日本で使われなくなった車いすを回収し、必要としている人々にギフトとして贈っています。回収した車いすは、クリーニングされ、念入りに整備されて、海外に送り出されます。

この活動は、山形県に住んでいた3歳のダニエル君が、病にかかり車いすの生活を余儀なくされた時から始まりました。障害を持つ子供のための医療システムが日本には確立されているので、ダニエル君はその恩恵を受けることが出来ました。しかし世界には適切なサポートを受けられない人々が、2千万人いると言われていています。障害のある人は車いすがなくては、孤独のまま、社会とのコンタクトが取れません。障害者の人生を奪ってしまうだけでなく、社会もその人に活躍の場を提供できないことは損失です。

ダニエル君の母親は、日本で育児ができたことを心から感謝していました。同時に、車いすを必要としている人のところに、なんとかして届けたいという想いが強くなりました。2000年の秋ごろから友人と使われなくなった車いすを回収し始めて以来、今日までに12のアジアの国々に550以上もの車いすが届けられました。プロジェクトが大きくなるにつれ、2008年にはNPO法人の認証を得ました。

クリーニング・整備して贈呈した車いすには、子どもや年老いた方が乗ります。ですから、私たちは新品同様にクリーニングするよう心がけるだけでなく、利用者の立場に立ってボランティアは高い基準と厳しい目で作業しています。

車いすの輸送に関しては、航空会社のご協力をいただいています。旅行者が車いすを飛行機

NPO Kibo no Kurumaisu (Wheelchairs of Hope) (Nerima-ku, Tokyo)

For the past 10 years, this NPO has been collecting wheelchairs that are no longer needed by care facilities for the aged and leasing companies. After volunteers repair, recondition, and polish the wheelchairs, they have donated them to the countries in Asia for 10 years. The group also enlists people traveling to countries in Asia for business or pleasure to transport the wheelchairs by asking them to personally take them to the destination countries and deliver them to parties at the airport. To date the organization has sent a total of 430 wheelchairs to nine countries.

Recommended by Mr. Mitsuru Kawasaki, Mito Bible Baptist Church

で運搬する場合、自分は機内持ち込みの手荷物だけにして、車いすを運んでくださる方もいます。もう一つの方法は船でコンテナ単位で100台以上まとめて運ぶ方法です。これまでに20フィートコンテナで沢山の車いすをモンゴル、フィリピン、タイに、船会社と商社のご協力を得て届けてきました。伊藤忠商事グループからは社会貢献活動の一環としてタイへの輸送費を全額支援して頂き、心から感謝しています。来年早々にはカンボジアにコンテナで100台送る予定です。

私たちは自らの向上のために、12月には理学療法士を招いて体に合った車いすという話を伺う計画もあります。一方で資金集めの方策には常に苦労が絶えません。そうした中で、聖書キリスト教会が会堂5階部分を無償で私たちに提供して下さっていることは、大きな助けです。

また、車いすを受け取る国々で、包括的なアプローチをしてくれるパートナーを求めています。ただ届けるだけではなく、その後も不具合はないかなどの、定期的に点検訪問をしてほしいと願っています。また、パートナーから、車いすを受け取った人の写真やビデオを送ってもらい、車いすの元々の提供者に見てもらいたいのです。

日本国内でも、パートナーシップを構築し地域社会とのつながりを大切にしていきたいと願っております。様々な技術や才能を持ったボランティアが集まっています。この働きは、その技術において、誠実さにおいて、意欲において向上し続けています。車いすを通して、もっともっと多くの人に希望の贈り物を届けたいと願っております。



作業場の風景



出発準備完了



行動範囲が広がるよ



車いすを受け取った少年



車いすを贈られて感激



もりもと きくお
森本 喜久男

(63歳／カンボジア王国)

カンボジアの伝統絹織物である絹緋に魅せられ、1996年にクメール伝統織物研究所を設立し、内戦により失われつつあったクメール織の技法復活と貧困層の支援のため活動を始めた。2003年にアンコールワットがあるシェムリアップの広大な敷地で「伝統の森プロジェクト」を開始し、養蚕、餌となる桑の植樹、染料になる虫の育成から糸を紡ぎ、染色、機織りと製品化までの全てがこの森で完結する伝統織物の継承とさらに食糧の自給生産から教育の全てをまかなうための施設を運営されている。

●推薦者／NPO法人 ふるさと南信州みどりの基金
理事長 伊澤 宏爾

伝統の森プロジェクト 代表
(写真：石川武志氏)

「社会貢献支援財団の受賞にかえて」

この度は、社会貢献者支援財団よりの受賞を頂きましたこと、うれしく光栄に思います。

1995年、カンボジアの現地で活動を開始して15年が経ちます。当時はまだ一部の地域で戦闘があるような頃でありました。しかし、その内戦の混乱の時代も終え、いまあらたな国づくりに向かおうとして、活気ある姿が現在のカンボジアであります。

内戦前には東南アジアの中でも代表的な絹織物が織られていましたが、その伝統も内戦のなかで消えかけようとしておりました。そんな伝統の技術を持つ人々を探し、出会いながらその復元に取り組んできました。そして、その技術や経験を若い世代に伝え、技術を育成、貧しさの中で暮らす村人に仕事を提供する仕事にかかわってきました。この10年間に、受け入れてきた研修生は900人を越えます。そのなかには、多くの孤児や母子家庭といわれる女性たちも含まれます。

カンボジアは豊かな自然環境のなかで、恵みとしての豊かな伝統の織物が織られてきました。しかし、この自然環境も戦乱の中で失われ、伝統の織物を復活させるためには、自然環境も再

Kikuo Morimoto (Age 63/ Kingdom of Cambodia)

Fascinated by the traditional silk fabric kasuri (splashed pattern) in Cambodia, Mr. Morimoto established the Institute for Khmer Traditional Textiles in 1996 and began to promote the revival of Khmer fabric techniques as well as efforts to assist the poor. In 2003 Mr. Morimoto started the Traditional Forests Project in the vast grounds of Siem Reap where Angkor Wat is located and operates a facility where all production processes of the silk fabric are completed within this forest. This includes the silk culture, planting of mulberry trees for silkworm food, cultivating insects for the dye, spinning, dying, and weaving. Operations also include passing on all aspects of producing traditional textiles, self-sufficiency in food, and education and training.

Recommended by Mr.Hiroji Izawa, the NPO Furusato-Minamishinshu Midorino Kikin

生させなければなりません。そのために、2002年から「伝統の森」再生事業に取り組み、素材となる桑の木、蚕、綿そして自然染料となる植物など、織物に必要な自然環境を再生する仕事に取り組んできました。現在、23ヘクタールの敷地では自然の森を育て、織物に必要な全てのものがそこにある、そんな自然環境を取り戻し始めています。

古くから、自然と暮らしてきたカンボジアの人々の知恵を取り戻し、伝統の仕事にかかわる誇りを持つ人々。そんな小さな新しい村を作りながら、伝統の織物のある生活を再生し、300人の人々と暮らしております。



クメール織物の製品



機織り風景



ハンモックで寝る子の側で糸を紡ぐ母



染料作り



工芸場



柄つけ用のひも作り



共同代表 村田 早耶香

ほうじん
NPO法人 かものはしプロジェクト
(東京都渋谷区)

カンボジアを訪れた際に同国の児童買春の存在に衝撃を受け、その撲滅を目指して活動をしている。貧困が理由でこの問題が起きていると知り、「かものはしプロジェクト」というNGOを平成17年に設立し、地元の作物を使ったブックカバーなどを製造し、雇用を創出して貧困から脱却する事に加え、被害に合う子どもたちを水際で食い止めるために、地元のNGOと共に孤児院支援や警察官の意識改革のためのトレーニングプロジェクトへの助成などの活動をされている。

●推薦者/木村 雅美



私達の作品です

この度は、当団体に栄えある賞を下さり、大変感謝しております。皆様、少しでも私たちの活動の紹介をさせていただきます。

活動を始めたきっかけは、19歳の時に、私自身が児童買春の問題と出会ったことから始まります。東南アジアに住む15歳女の子が、家族のために出稼ぎに出て、騙されて売春宿に売られ、エイズで亡くなるという実話を授業で聞きました。彼女と私の違いは、生まれた場所が違うということだけです。それだけで未来を選ばずに傷つけられる人が世の中にはいる。私はこの事実を知って、いてもたってもいられなくなり現場を見に行くことを決心しました。

現場に行くと、予想よりもはるかに残酷な現状を目にしました。カンボジア滞在中、児童買春の被害者を保護している施設で、6歳と12歳の姉妹に出会いました。二人は借金の形に取られ、売春宿で強制的に客を取られ、その後保護されました。このとき、幼い子どもを含む、多くの被害者がいる事実を目の当たりにし、衝撃を受けると共に、何とかこの状況を変えたいと思いました。そして、2002年に仲間と共にかものはしプロジェクトを発足したのです。

かものはしプロジェクトは、児童労働の中でも、最も子どもの心と体を傷つける児童買春・人身売買問題をなくすために活動しています。

私たちは、当時、急激に児童買春被害者が増加していたカンボジアで、民芸品工房を運営し

NPO Kamonohashi Project (Shibuya-ku, Tokyo)

Shocked to learn of the existence of child prostitution in Cambodia upon their visit to that country, the members of the organization are committed to the eradication of this problem in Cambodia.

The NGO Kamonohashi Project was established in 2005 after members of the organization learned that the problem of child prostitution was caused by poverty. The group produces book covers and other items using local crops and materials. This helps create employment to help local people escape from poverty. To prevent children from falling victim to child prostitution, the group also engages in efforts to manage orphanages in cooperation with the local NGOs. It also provides support for training programs including changing the attitudes of local police forces.

Recommended by Ms. Masami Kimura

ています。児童買春問題の根本原因は、「貧困」にあり、貧しい家庭の大人に就業の場を提供することで、貧しさから子どもを売り渡すことを未然に防いでいます。このような活動の中で、収入を得て子どもが学校に行けるようになった等、嬉しい報告もあります。ミッション達成に向けて試行錯誤をする日々ではありますが、少しずつ成果も出てきました。今後、この事業できちんと収益が出るようにしていき、他の地域にも活動を展開していきます。今後も、一人でも多くの子ども達の笑顔を守りたいと考えています。

一方、日本では、サポーター・IT事業の二本柱でカンボジアの活動を支えています。サポーター事業では、ご支援してくださる方々を募集しています。また、イベントやWEBを通して活動報告を行っており、それと同時に、多くの方々が楽しく国際協力に関わる取り組みにも力を入れています。IT事業部は、企業のWEB制作の一部である、htmlコーディングを行い、かものはしプロジェクト全体の活動資金を創出しています。こうして、カンボジアと日本が一体となり、「笑顔がつながる世界」の実現に向けて、日々尽力しています。



■皆でがんばるー



■作業に打ち込む



■作業風景



■いきいきと笑顔で働く



■孤児院の子供達の笑顔



たに がき ゆう ぞう
谷垣 雄三
(69歳/ニジェール共和国)

昭和54年に産業医として西アフリカ・ニジェールに派遣された後、57年からJICAの派遣医師として19年間勤務。その後も現地で医療活動をすることを希望し現在に至る。私費を投じて病院を造り、診療し、年間千件に渡る手術を行ってきた。平成13年からは、医師仲間や出身地の高校の同級生による支援のもとで、30年もの長きにわたり医療活動を続けられている。

●推薦者/財団法人 京都オムロン地域協力基金

1969年信州大学医学部を卒業。卒後大学医学部病院に頼らず、小川赤十字病院にて整形外科、麻酔科などの研修を行い、保生園病院にて胸部外科、麻酔の研修、帯広市立病院にて一般外科を研修。1979年アフリカ・ニジェール・アガデスの国際資源社の医師として派遣され、1年6ヶ月滞在。その時の医療のない現地の住民の状態に心を動かされ、帰国後フランス語の研修を積み、1982年、ニジェール政府の要請により、JICAより単独派遣としてニジェールの首都ニアメの国立医科大学の外科教授として派遣された。

ニジェールは日本の3倍の広さがあり、人口は1500万人であるが、外科医が3人しかいないという悲惨な事情の下、定時手術毎週50名という激務をこなしてきた。しかし10日もかけてラクダに乗せられて来院する急患の大部分は手遅れで悲惨な状態という事実に対して、地方に外科医を備えた診療所を沢山作る必要がある。そのためには、1) そもそも外科医を増やす必要がある。2) 小さくてもいいから地方に外科医を配置できる病院が必要である。一つの県に小さくてもいいが、一つの外科病院を作ることを提案した。たとえ外科医が生まれても全ての医師が首都ニアメに集中しているようでは意味がない。少なくとも60万人にひとつの外科病院を作るようにとニジェール厚生省に提案をした。

また、これらの困難性を自ら打破しようと思い立ち、首都より770km離れたテッサワに私費を投じて外科診療所を設立した。そこで、多数の患者の手術を行いながら、2名の外科希望の医師を教育し、JICAの協力で日本にこの2名を派遣し研修した。この2名は帰国後ニジェールの貴重な外科医として活躍中である。働きかけにより、現在は外科医が20名程度に増加している。

また、ニジェールの医療が先進国の援助にのみ頼る援助漬け医療であることも気がかりで、

Yuzo Tanigaki (Age 69/ Republic of Niger)

After completion of his assignment as an industrial doctor in the Republic of Niger in West Africa in 1979, Mr. Tanigaki worked as a JICA dispatched doctor for 19 years from 1982. After completing his JICA work, Mr. Tanigaki chose to continue his medical work in Niger where he remains today. In addition to building a hospital with his own money, he has been providing medical care and performing over 1,000 surgeries a year. In 2001, after support from JICA was discontinued, Mr. Tanigaki continued his medical care activities with help from fellow doctors and high school classmates from his home town, and has been doing this for 30 years.

Recommended by the Kyoto Omron Regional Cooperation Foundation

いつの日か援助に頼らない自力の医療（患者の負担を原則に）を実現しなければならないと考えてきた。そのためには、住民の負担で可能な外科治療、薬品をほとんど使わない、酸素吸入などを要しない、手術材料などもなるべく安い糸を使う。高価なガーゼではなくタオルを使う、全身麻酔を避けて局所麻酔に徹するなどの工夫により、経費の節約に勤めてきた。これまで行った手術は毎年1千例を超える。

二つの悲劇に襲われることとなった。一つはJICAより受けていた単独派遣という待遇をJICAの規則により打ち切られたことであり、さらにはもう一つは妻静子の突然の死亡である。

そんな困難に立ち向かうべく、現地においてはさらに新しい病棟を建て、新しい看護婦を雇い、新しい患者に再び手術を施し、残りの人生をニジェールの人々の命を救うために捧げるつもりである。

活動には、医師の仲間によるNPO法人、OMEAAA(アジア・アフリカにおける医療教育支援機構)から750万円の寄付を毎年頂いていることを付したい。



現地活動風景





かわはら なお ゆき
川原 尚行
(45歳/スーダン共和国)

NPO法人/国際NGO法人
ロシナンテス 理事長

日本大使館の医務官としてスーダンに赴任していたが、多くの子どもがマラリアやコレラで亡くなるのを目の当たりにしながらスーダンの人々を診察することが許されないことに葛藤し、平成17年に外務省を辞め、スーダンで医療活動を始めた。活動の基盤となるスーダン初のNPO法人ロシナンテスを設立し、出身地の高校や大学のOBからの寄付や帰国した際の講演活動で活動資金を賄っている。医療活動の他、現地での学校建設にも取り組まれている。

●推薦者/NPO法人 ロシナンテス

このたびは社会貢献支援財団よりこのような賞を頂き、身に余る光栄だと思っております。今回は私が代表する形でしたが、ロシナンテスのメンバー、そして応援してくださる方の全員で受賞したと思っております。

私は外務省に在籍し、在スーダン日本大使館の医務官として赴任しておりました。スーダンは、政治的な理由から日本からの援助が停止され、また医務官としての職務上の制限もあり、現地の人々への診療行為や、二国間の医療援助が不可能な状態でした。

しかし、スーダンで病める患者を何とかしたいという気持ちから、外務省を辞職する決意をしました。そして多くの方々からの支援を得て、05年よりスーダンで医療活動を開始しました。

翌年に、私の故郷である福岡県北九州市を本部とするNPO法人「ロシナンテス」を設立しました。この法人は、私の専門性をもとに、医療事業を中心に、水・衛生事業、学校・教育事業、スポーツ事業、交流事業、母子保健事業といった活動を行っています。

医療事業においては、無医村を中心とした巡回診療から始まり、スーダン東部の村に診療所を立ち上げ、そこにスーダン人の医療スタッフを配置して医療活動を行っています。また、劣悪な水環境の改善のために給水所の建設を行いました。そして、スーダンでは女子教育が重視されていないことから、女子小学校の建設支援を行い、より多くの女子に読み書きを習得する

Naoyuki Kawahara (Age 45/ Republic of Sudan)

Dr. Kawahara was assigned to the Japanese embassy as the medical officer in the Republic of the Sudan. While working there, Dr. Kawahara felt a strong sense of conflict over the fact that he was not allowed to provide medical care to the Sudanese people and had to watch many children dying from malaria and cholera right in front of his eyes. He decided to resign from the Ministry of Foreign Affairs in 2005 and began medical care activities on his own in Sudan. He established the NPO Rocinantes, the first Japanese NPO in Sudan, as the base for his activities. Dr. Kawahara covers the costs of his activities from donations made by high school and university alumni as well as from lectures he gives during visits to Japan. In addition to providing local medical care, Dr. Kawahara has also been devoting efforts to building schools in Sudan.

Recommended by the NPO Rocinantes

ための勉強の機会を提供しています。JICAとの連携事業である母子保健事業においては、伝統的産婆さんにも頼ってきた出産を助産師との協力によるものに変えて行くことや、妊産婦検診や乳児検診、母親学級などを助産師とともに行っています。

上記のような事業を同一地域で行い、アフリカでの地域開発の一助となることを目指しています。

またスポーツ事業では、スーダンで一番人気のサッカーを通じての子供たちへの教育を目指して、少年サッカー教室を設立しました。さらに女子サッカーの普及にも努めています。

団体名の「ロシナンテス」とは、ドンキホーテにでてくる痩せ馬「ロシナンテ」を複数形にしたものです。自分も仲間もみんな痩せ馬の「ロシナンテ」であり、そんな痩せ馬でもたくさん集まればきっと大きな力になる、という思いに由来しております。

実際にスーダンで活動するスタッフの一人一人が、ロシナンテですし、日本で応援をしてくださる方々の一人一人もロシナンテです。

この受賞を機に、スーダンや日本にいるロシナンテとともに、さらに精進してまいりたいと思います。



■ サッカー交流



■ 学習風景



■ 診療風景



■ 川原氏とスーダンの子

(活動写真：内藤 順司氏)



ろうれんす えふ きゃんべる
Lawrence F. Campbell

(68歳／アメリカ合衆国)

1960年代にジャマイカの農村地帯で地域開発事業に参加したことから人の教育やリハビリテーションに強い関心を抱き、1964年からその分野に従事し、その後30年以上にわたりアジア、アフリカ、ラテンアメリカで視覚障害児の教育機会の向上のため尽力し、多くの視覚障害児が勉強に励み社会に参加できることを願い活動を続けられている。

●推薦者／千葉 寿夫

1964年にボストン大学を卒業した私は、当時何の目的もなく、若き大統領ジョン F. ケネディに影響されていた同世代と同じに、発展途上国でボランティア活動をすることにしました。そして1ヶ月後、西インド諸島のジャマイカの田舎の山間の村落に着任した私は、村の学校の教師としての任務に加えて、いくつかの個別の案件にも取り組むことになりました。その一つは成人識字能力の向上、二つ目は、共同生活を行うようになったハンセン病患者の定期的な健康管理、三つ目は余剰食糧の提供プログラムです。

ある日、私が、食糧流通プロジェクトの関係で遠く離れた農村地域を回っていた時です。階段のかかってない、高床式の小屋を見つけましたが、倉庫なのだろうと思っていたそこに、中年の盲目の女性がベッドの上に座っていて、大変ショックを受けました。彼女に話しかけると、盲目になる15年前までお針子をしていたと、言いました。彼女の夫は、妻の視覚の回復見込みが全くないと知ると、彼女を捨てて、遠くへ移り住んだといいます。彼女は置き去りにされ、この小屋に閉じ込められ、親切な隣人が時折持ってきてくれる残飯だけを頼りに生きながらえてきたということでした。

私は家に戻っても、一晩中この女性のことが頭から離れませんでした。数日後、彼女のもとを再度訪ね、何か教えてあげられる事はないかと尋ねましたが、盲目の人に教えてあげることを見つけるのは困難です。しかしその時の若さが自分を突き動かし、その女性、ハリソンさんと私は一緒に、“何か”に取り組み始めました。

わずかの間に学生であった私が今度は教える立場になっていました。彼女は大変にのみこみが早く、自分で移動したり、自給の作物を作る畑や、火を熾したり、生活に必要な最低限の方法を次々と習得していきました。そんな彼女に対して、近隣の見方も明らかに変わってきます。わずか2年の間に、彼女は障害がある女性のための小規模ローンプログラムを利用して、中古のミシンを入手し、村人の衣服の修繕をはじめました。そして10年後には、小都市に移り、私が見た最後の彼女は、3人を雇う企業の経営者でした。

ハリソンさんと共に過ごしていた間、私は、米国のある組織に、盲人に物事を教える方法についてのアドバイスを求めて幾度となく相談をしました。西インド諸島でのボランティア期間が満了する直前、その組織から、盲人のために教育とリハビリテーションにおける修士学位を取得してはどうかとのオファーがありました。私は喜

Lawrence F. Campbell (Age 68/ United States)

After his experience participating in a regional development project in a rural area of Jamaica in the 1960s, Dr. Campbell had a strong interest in the education and rehabilitation of people. Becoming involved in both areas from 1964 onwards, he has spent more than 30 years devoting his efforts to the improvement of educational opportunities for visually impaired children in Asia, Africa, and Latin America. Today Dr. Campbell continues his activities and to give encouragement to visually impaired children to study so that they will be able to fully participate in society.

Recommended by Mr. Hisao Chiba, Nippon Foundation

んでその申し出を受け、以来私の人生が大きく変わったのです。

修士の勉強に続いて私はペンシルベニアとコネチカットで盲目の子供のための行動訓練に専門の指導員として務め、1971年にハートフォードのオークヒル盲学校の副校長に就任しました。翌年、私は同僚から博士課程への道を進められ、20人に1人という難関を経て、ボストン大学の博士課程の奨学金を受けることが出来ました。

博士課程を修学中に、聴覚障害であって、かつ盲目である子供の教師のための教員養成事業を担当するように大学側から言われました。発展途上国において私の知識や経験をどう生かすことが出来るだろうか、そんなことを考え続けました。

1977年そのチャンスがやってきました。ヘレン・ケラー・インターナショナルの事務局長から、特殊教育のディレクターに就任しないかと話をもちかけられたのです。その申し出を喜んでお受けすることにし、1978年に就任しました。

ここでの任務は、発展途上国であるアフリカやアジア、ラテンアメリカ、数多くの政府と非政府組織と共に、盲目の子どもための教育プログラムや、盲目の大人のためのリハビリテーションプログラムの拡充が主な仕事でした。

1988年に、私はヘレン・ケラーが初等教育を受けた、盲人の為の学校パーキンスの国際組織、国際パーキンス盲学校の初代ディレクターに就任しました。私はここで、発展途上国における、盲ろう者やこれまで教育をほとんど受けたことがない子供のニーズのための活動に心血を注ぎました。

1993年に、フィラデルフィアのオーバーブルック盲学校から、国際プログラムの責任者にならないかと要請がありました。このプログラムは最新の技術革新を使い新しい教育とリハビリテーションの開発に焦点が当てられていました。盲目の人々の最大の課題は、印刷物へのアクセスがあります。盲人の人達は、目の見える人に読んで聞かせてもらうか、点字に翻訳されるのを長い間待つしか方法はありませんでした。しかしデジタル時代となり、急速にコンピュータが発達した1990年が新たな時代の幕開けとなりました。

そして、発展途上国の何百万、何千万の盲人にとってかなわぬ夢とおもわれていたことが、今日、日本財団(日本)やソロス財団(米国)の援助によって、実現するに至ったことは、感謝の念に堪えません。

オーバーブルック盲学校でのプログラムや、最近では国際視覚障害者教育協議会(The International Council for Education of People with Visual Impairment(ICEVI))での仕事、そして、日本財団の奨励とサポートにより、現在も充実した活動を続けています。

これらは、開発途上地域で数千の盲人への可能性の扉を開くこととなりました。「盲人の定義を変える」。顕著なものとしては、情報技術の発達によって、これまで盲人には不可能であった大学の研究レベルにおいて、彼らは勉強をしています。1829年のBraille読書と書記体系の開発以来、遅々として進まなかったこの分野においての発展に少しでも自分が参加できたことに、私は喜びを隠せません。

2009年7月に引退しましたが、私の人生は、相変わらず活気に充ち溢れ、これまで通りの忙しい日々です。現在、ICEVIの理事長として、発展途上国の教育システムが整っていない400万人以上の盲目の子供への活動に取り組んでいます。これは私の命ある限り果たすべき使命であると考えます。

唯一変わったことといえば、あの高床式のベッドに座っていた盲人の女性と私の、二人の人生を大きく変えた、1964年の出会いの時のように、私はまた一人のボランティアになったということです。



■ アセアンの視覚障害者と共に



■ オーバーブルック盲学校にて卒業生と



■ フィリピン世界銀行情報センターにて



■ 国際視覚障害者教育評議員会世界大会(マレーシア)にて